



災害ボランティア報告書

新潟県中越大震災ボランティア活動のあしあと

ボランティアコーディネート編

新潟大学

中越大震災ボランティア活動報告書編集委員会

私には何も出来ないのだから、
ばあちゃんやじいちゃんの、背中に手を当てて静かに、
一日中はなしを聞きましょう。
小千谷だけでも、30,000人のボランティアが必要です。
わたしだけでは何も出来ないに等しいです。
ひとりから動いて、何も変えられませんが、ひとりが動かなければ始まりません。

小千谷市ボランティアセンターからのメールより

ボランティアコーディネーターってなーに？

本書は、2004年10月23日に発生した新潟県中越大地震にかかわって、新潟大学の活動の一部を学生がまとめたものです。とりわけ、ボランティアをコーディネートする組織をつくり、動かしていったことを中心にしているので、『災害ボランティア報告書（ボランティアコーディネーター編）』としていきます。

これは、2004年7月13日に新潟県中央部を襲った水害の復興に携わった『災害ボランティア報告書 実践編』（2005年3月発行）に続くものです。水害復興にあたっては、とにかくやってみた、というところが実感でした。その過程で抱いたいろいろな想いをつなげていくと、ボランティアをコーディネートする組織が必要ということでした。『実践編』の最後は「次の一歩へ」と題する文で閉じていますが、本書はその一歩、今の一歩をまとめたものです。

『実践編』で示した次の一歩、「できることから」、「つながりながら進む」、「経験を伝える」、「参加者や相手の立場で考える」、「ボランティアへの背中をおす」等々が結実して、学生による「震災ボランティア新大本部」の看板が掲げられました。

※新大：県内では「しんだい」で通っています。「にいだい」ではありません。

みなさんニホー六等でご承知のように、台風23号は21日未明から朝にかけて関東を横断後、茨城県沖の太平洋に抜け、20府県で49人が死亡、行方不明15人と被害を出しました。また、今回の新潟中越地震でも、多大な被害が出ています。このため、自衛隊や行政機関はもちろん、各地で一般市民たちの手による、ボランティアセンターも立ち上がり、懸命に災害復旧が進められています。しかし、あまりの被害の大きさのため、復旧のための資材や物資が不足しています。復旧活動に参加するのも大切なことですが、遠く離れていても、できることがあります。

被災地では、物資が不足しています。復旧作業支援のため、みんなの力を貸してください！

■タオル・石鹼・洗剤・スコップなど

こんなものからでも結構です。自宅にあるもの、友達や仲間、そしてご家族にも呼びかけて、被災地に送りましょう。新潟大学が、みなさんの「気持ち」をお預かりします。

受け入れ先：新潟大学 学生生活支援課 262-7506 (総合教育研究棟1F)

ボランティアコーディネーターとは 想いをつなげること

本書のねらいは第一に、新潟大学の実践を通して、ボランティアコーディネーターという言葉とその役割を知ってもらうということ、どうすればそのような組織をつくれるのか、運営の留意点はなにかなどを理解してもらって、今後の参考としてもらうことにあります。ただし、ボランティアコーディネーターはこうでねーと、ということはありません。そのあり方は多様です。

第二に、新潟大学の活動を記録として残すこと、第三に、学生の創意工夫のつまった活動を広く知ってもらうことなどもあげられます。

しかし、お読みいただいて一番心に残るのは、学生、教職員、学外の方々にかかわらず、活動した人たちの想いではないでしょうか。みんないろんな想いを抱きながら、その想いをつなげていきました。活動できなかった人の想いもあります。しかしそれも、いつか、なにかにつながっていくはず。読まれた方々の想いが、私たちの想いと、いつか、どこかにつながることを願います。

本書のねらい

目次

中越大震災基礎データ

コーディネートってなんだろう

6 4 2

第一章 できること探し

立ち上げ

大学生活でできること

学生ボランティアの可能性

自分たちの手で、大学の中に「場」をつくる

仲間と力を合わせて

見守り、支える人たち

コラム①最初に動いた人

2 1 1 1 1 1 8
0 8 6 4 2 0

第二章 かかわりづくり

新潟大学震災ボランティア本部ができるまで

ルール作り

ホームページを作ろう

たくさんの人を巻き込む情報発信

情報伝達ノート

ファシリテーションシヨングラフイック

マスコミと上手く付き合う方法

誰が来ても安心な工夫

お茶の間づくり

支部を作ってゲリラ拡大作戦

コラム：「神戸」のとき、子どもだった人

3 3 3 3 3 2 2 2 2 2 2
4 3 2 1 0 9 8 7 6 4 2

第三章 つながりからひろがりへ

やれることから、ひとつひとつ	36
「私たちでもできる」ことからひろがりへ	38
～段ボールマイスター～	
～柵田の保全活動から生まれたひろがり～掘るまいか～	40
～BLOGから生まれたひろがり～	42
～星空ファクトリー～	
～OBのちからでひろがりへ～	44
～子どもの学びを支援する～	44
「600人の気持ち」のひろがり	46
～おにぎり炊き出しボランティア～	
～大学の講義から飛び出して～	48
～全学共通科目「新潟学」受講生～	
～研究分野からひろがりへ～	50
～新潟大学積雪地域災害研究センター～	
～学びの現場からのひろがり～	52
～農学部被災農地支援学生ボランティア～	
コラム：現地に行った人	54

第四章 手作りの道具たち

ご自由にコピーしてお使い下さい。	56
コラム：カタチのある、ボランティア	69
	70

第五章 つぎの扉へ

震災ボランティア本部座談会	72
活動のふりかえり	76
あるスタッフの本音	78
あとかき	80
コラム：「中間支援」の現場から	82

平成 16 年 10 月 23 日 17 時 56 分頃、新潟県中越地方の深さ 13km で M6.8(暫定値、以下同様) の地震が発生し、新潟県の川口町で震度 7、小千谷市、山古志村、小国町で震度 6 強、長岡市、十日町市、栃尾市、越路町、三島町、堀之内町、広神村、守門村、入広瀬村、川西町、中里村、刈羽村で震度 6 弱を観測したほか、東北地方から近畿地方にかけて震度 1 から 5 強を観測した。

また、同日 18 時 11 分頃に M6.0 の地震が発生し、新潟県小千谷市で震度 6 強を、18 時 34 分頃に M6.5 の地震 (最大余震) が発生し、新潟県の十日町市、川口町、小国町で震度 6 強を観測した。この地震活動は、10 月 23 日 17 時 56 分頃発生した地震 (M6.8) を本震とする本震 - 余震型であると考えられる。

本震発生直後 1 時間以内に震度 6 強の余震が 2 回発生するなど活発な余震活動があった。これらの震源は、北北東 - 南南西方向に長さ約 30km の範囲で分布している。その後、余震活動は減衰傾向にあるが、10 月 23 日 19 時 45 分に M5.7 (最大震度 6 弱)、10 月 27 日に M6.1 (最大震度 6 弱)、11 月 8 日に M5.9 (最大震度 5 強) の地震が発生するなど、引き続き大きな余震が発生している。

— 中略 —

気象庁は 10 月 23 日 17 時 56 分頃に発生した地震を「平成 16 年 (2004 年) 新潟県中越地震」(英語名 : The Mid Niigata prefecture Earthquake in 2004) と命名した。

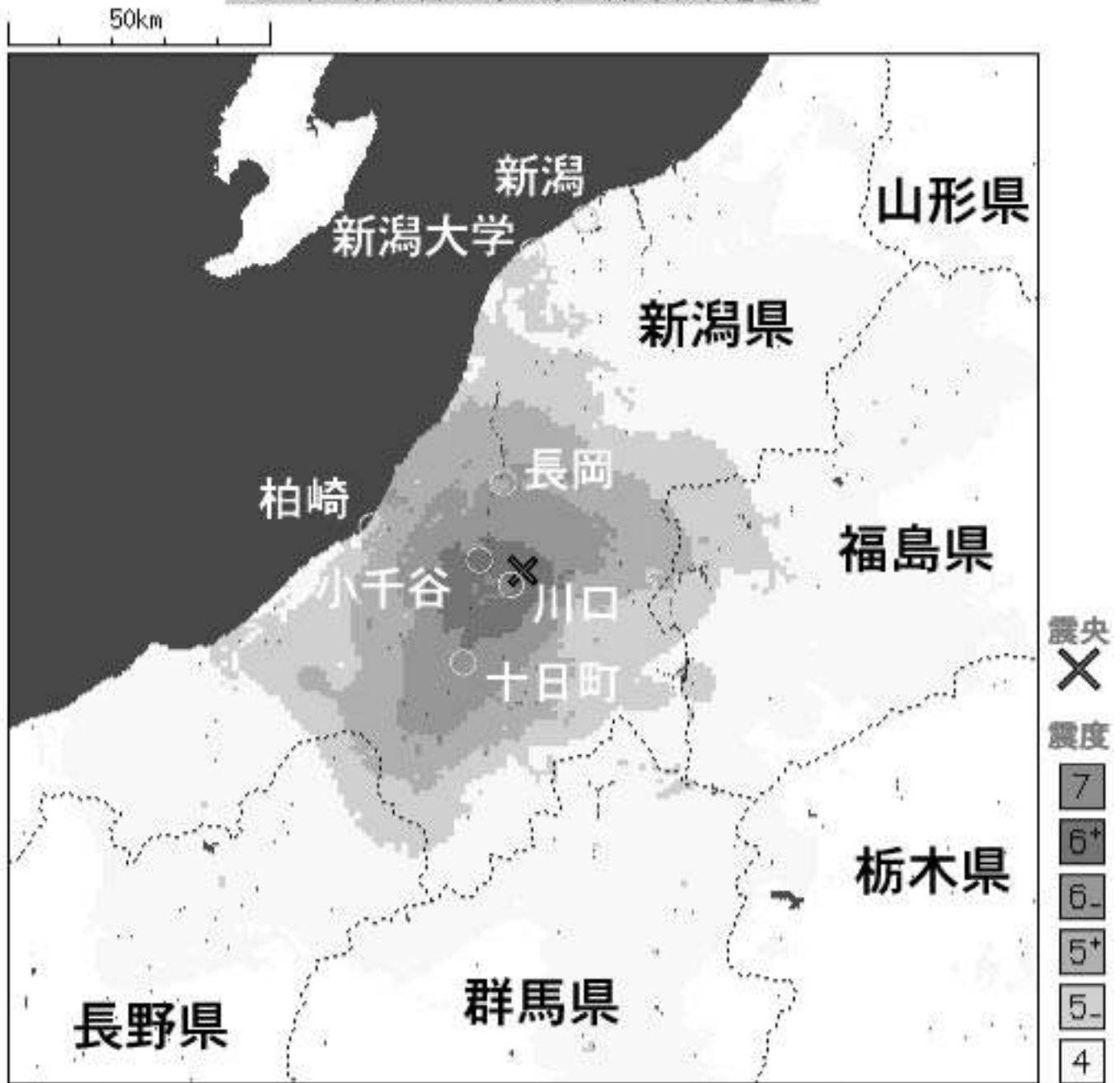
— 気象庁発表 地震概要より —



このとき、私たちはいったい何ができたんだろう。
何をすべきだったんだろう。

写真提供：小千谷市災害ボランティアセンター

2004年10月23日17時56分 新潟県中越地方



北緯37.3度 東経138.9度 深さ 13km M:6.8

○人的被害

死者 59名

負傷者 4,795名

○住家被害

120,550棟、129,209世帯

—新潟県中越大震災災害対策本部発表 平成18年2月1日10:00現在—

新潟大学に居るのだから、
他人事ではないと思った。
阪神大震災を思い出した。
とにかく何かしたかった。
大学に居ながらできることはないだろうか。
皆それぞれきっかけは違っても、
選んだのは同じ
ボランティアコーディネーターだった。

コーディネーターって何だろう。
私にとってどんな意味を持つのだろうか。
答えを見つけた人も
まだ見つけられない人も
やっぱりこれからもずっと
考え続けていくのだろうか。
今感じるこの想いも
いつかカタチにできたらいいと思う。



私たち新潟大学震災ボランティア本部はボランティアコーディネーターを行っています。

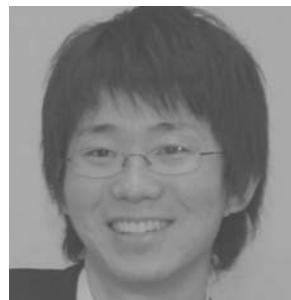
……聞き慣れない単語が出てきました。そう、「ボランティアコーディネーター」です。どういう意味なのでしょう？本部では「現地ボランティアへ行く学生、ボランティアをしたいけれど、どうしたらよいか分からないという人の背中に、そっと手を添えるような活動」と定義しています。簡潔に言えば、ボランティアのコーディネーターですね。

では、そもそも「コーディネーター」とは何でしょうか？調べてみましょう。「コーディネーター」【coordinate】①各部分の調整をはかって、全体がうまくいくように整えること。②服装などで、色・素材・デザインなどの釣り合いがとれるように組み合わせること。また、その組み合わせ。（広辞苑第5版より引用）

——この場合、①ですね。しかし細かいところまで考えるならば、この定義は人それぞれ少しずつ変わっていくのではないかと思えます。実際、本部スタッフに「あなたにとってコーディネーターとは何ですか？」と聞けば、全員が違う事を答えるはず。もちろん、人それぞれ価値観は違いますし、いったいどこまでをコーディネーターと

清野 勝弘

せいのかつひろ



ボランティア報告書編集委員会編集長。
新潟大学経済学部3年。
座右の銘は「人事を尽して天命を待つ」。

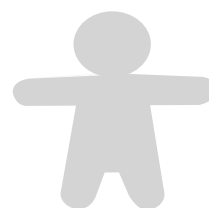
するのかわという線引きの問題もあります。まだ答えを探している途中の人も居るでしょう。

ただ、それでも私たちに共通しているのは「思い」を大切にしたいという気持ちです。被災地へボランティアに行きたいという思いを実現させる、「少しでも復興の手助けになれば」という提供者の思いと共に物資を被災地へ送る……つまり「思いを繋げる・カタチにする」、これこそが「コーディネーター」だと思えます。

そう考えると、本書もまたコーディネーターと言えるのかもしれませんが。私たちの思いが込められているのですから。読んでくれた貴方にそれが伝わったら、嬉しいな。

第一章

できること探し



- 立ち上げ
 - 大学生活でできること
 - 学生ボランティアの可能性
 - 自分たちの手で、大学の中に「場」をつくる
 - 仲間と力を合わせて
 - 見守り、支える人たち
- コラム：最初に動いた人

こうして、 私たちは一歩を踏み出した。

もし、次に災害が起きたら…。

平成一六年十月二十二日午後六時。
7・13水害でのボランティア活動を
ふりかえる座談会が行われていた。水
害から約三ヶ月。現地に行った人も、
理由があつて現地には行けなかった人
も、あのときの想いを忘れないために、
それぞれお互いの気持ちを伝え合っ
た。その日、最後に投げかけられた問
いは、「もし、次に災害が起きたらど
うする？」だった。また、水害が残し
た傷が完全に癒えていないのに、次に
災害が起きたらなんて私は考えられな
い。でも、みんなそれぞれに考えたこ
とを発言していく。友達に相談する
情報を知っていきそうな人に連絡をとつ

てみる。行けるところなら行く。

私はそれを聞きながら、水害の復興
ボランティアに初めて行くとき、自分
は何を考えていたかを思い出してみ
た。現地までどうやって行けばいいん
だろう。どんな服装で行けばいいん
だろう。長靴があるかもしれないけど、
持ってないしどうしよう。持ち物は何
が必要なんだろう。昼ごはんは買えな
いだろうから、おにぎり持っていかな
くちや。そもそも、私が現地に行つた
ところで何ができるんだろう・・・現
地にボランティアに行くとなったら、
こんなふうに疑問や不安は尽きない。
それでも、私たちがためらうことなくボ
ランティアに取り組むことができたの
は、以前一緒に活動していた先輩から

おおたきゆか

大滝 優果

新潟大学教育人間科学部4年

7・13水害でのボランティア
の経験をもとに、新大震災ボ
ランティア本部の立ち上げに
関わる。自分から動き出すと
何かが変わることを学んだ。



直接情報をもたらえたからであり、また普段から一緒に活動している友達も一緒にに行けることになったからである。

「そっだ、大学の中に相談センターみたいなのがあったらいいかも・・・」と思った。ボランティアに行きたいなと思った人が、ふらつと立ち寄って相談できる場所。そこには、実際に現地にボランティアに行った人がいて、現地のありのままの状況を教えたり、体験に基づくアドバイスをくれたりする。それは、学生同士でなければあまり意味がない。学務のおじさんが仏頂面で相談窓口に座っていても、近づきたいし、ましてや相談なんてできない。でも、もしおじさんではなくて、自分の友達がそこに座っていたらどうだろう? 「あのお、ボランティアに行きたいんだけど、まずどこに行ったらいいかわかんなくて・・・」こんな感じで、学生同士近い立場で気軽に相談できる。「もし、次に災害が起きたら、大学の中に学生の学生による学生のための相談センターを作ろう。」私はそうつぶやいていた。

この話をしているとき、まさか二十四時間以内に「次の災害」が起こるなんて誰が想像していただろうか?

本当に災害が起きてしまった。

十月二十三日午後五時五十六分。地震発生。

私は友達ちと遊びに出かけていた。その中には前日の座談会に参加していた人もいた。震源地は関東だという噂が流れ、関東出身の友だちが慌てて実家に電話をするが、つながらない。とにかく帰ろうと車に乗り込んだが、余震が続く。道路も渋滞し、橋の上でまたグラツと大きく揺れる。怖い。とにかく怖かった。

震源地が新潟県中越地方であることを、家に帰ってから知った。「次の災害」がこんなにすぐに、こんなに近いところで起きてしまった。

学生ボランティア コーディネーター募集。

十月二十七日。

水害のときに一緒に活動した先輩から電話があった。「優果ちゃんがこの前の座談会で言っていた相談センターを大学に作ろうよ。」

驚いた。地震発生から数日、自分も何かできることがないかなと思っただけなのに、センターを立ち上げるなんて考えていなかった。自分が座談会で言ったことを忘れていたわけではないが、自分が言ったこと、現実

起こっていることを結びつけて考えていなかったのだ。

それから、水害のときに一緒に活動した仲間が集合し、私たちにできることを探した。大学側との交渉は先輩方が進めてくれた。私たちは水害のときの反省から、内輪だけで動くのではなく、広く多くの学生に呼びかけることにした。三日間限りの「震災人材呼びかけプロジェクト」を立ち上げ、誰もが嫌でも目にはいるであろう大きな模造紙でカラフルなポスターを作った。たくさんの人たちに関心を持ってもらいたいという思いを込めて、約三十枚を手書きし、各学部の校舎や学食に貼り出した。

十月二十九日。

ポスターを見て興味をもってくれた約二十人の学生さんに集まってもらい、説明会を行った。そして、この組織の名前を「新大震災ボランティア本部」と命名した。書道科の学生が看板を作り、パソコンが得意な学生がこの日のうちにメーリングを作った。これからはしなければならぬこと・していきたいことのリストを作った。みんなその日初めて顔をあわせたばかりなのに、自分にできることを探してテキパキと動く。この様子を見て私は驚いた。そして嬉しく思った。

こうして、私たちは一歩を踏み出した。



『災害ボランティア報告書～ボランティア実践編～』。この報告集づくりも、大滝さんは関わっている。



水害、地震のボランティア経験から、自分一人じゃ何もできないことを痛感した。



地震が起きて、新しい仲間ができ、絆が強くなった。仲間があつてこそ頑張れる。

学生に期待すること、
それはやっぱり自発性でしようね。
先生方とか大学からやってくれと
頼まれてはじめるのではなく、
自主的な取り組み、
それを何よりも尊重したいと思います。

たくさんの人たちに関心を
持つてもらいたい。

これからの若い人には、あなたがたも若いけど、もっと下の高校生とか、まだボランティアの体験のない人達には、これから作られる報告書とか活動の体験記のようなものを是非広く読んでいただいて関心をもっていたらいいと思います。それで、自分がいるん

な場面で何ができるかを考える時間を
持つてほしいと思います。被災された
現場に行かなくても、大学内で、炊き
出しをして、おにぎりなんかを作った
り、それだけやった人たちだっている
わけですが、それも立派なボランティア
活動の一つですよ。

それから、何も災害だけではなくて、
地域のゴミの問題であるとか、道路の



はせがわあきら

新潟大学学長
長谷川 彰

2002年2月から学長を務める。物性理論を研究されている理学博士。
とてもあたたかみがある我らの学長。



落ち葉の問題とか、身近なところで、社会に貢献できることもたくさんあるのですから、そういうことをたまには勉強の合間に一体自分は何ができるのかを考える時間をもっていただければありがたいですね。それが全体がよくなっていく第一歩だと思いますから。自分の行動はいろんな人に効果が波及するんだと、行動する人はそういうことを信じてやっていただきたい、必ず他の人にも影響を与えるんだという信念をもって、やっていただきたいですね。

色々な場面において何ができるかっていうのは本当に色々なやり方があると思うので、是非それは考えてみてください。大学側から、何をやってほしいかというようなことは言いません、それこそボランティアですから(笑)。それから、学生の自分はやっぱり勉強でありますから、それとのバランスですね、そこもよく考えていただきたい。あなたがたもこれからの長い人生、そのなかのいろんな場面でボランティアの必要性があると思います。長期的な視点に立って、これから災害だけではない、停電だってそうですよね。(注：取材日の2005年12月22日、朝から夕方にかけて新潟市内全域が停電に見舞われた)これだってひとつの危機ですよ、こういうときどうするかを考えていただきたいですね。

先に経験を積んだ人から学ぶ。

どういうニーズがあるのか、それは場所により、同じ被災された場所でも、それぞれ違うと思うんですね。考えてもみなかったような、現場の体験といえますか、そういうところから学ぶべきものは沢山あると思いますね。災害が起きたからといってすぐ現場に行くわけにはいきません。ボランティアをやる人、取り組む人たちの安全性も大事ですよ。安全性を確保しながら行くくちやいけない。しかし、現場に行く前に、先に経験を積んだ人たちがたくさんいるわけですから、そういう人たちから、平素からまず学ぶことが大事ですね。

これは歯学部の方が仰っていたことですが、災害のあるところには、水もない、水で歯を磨くなんてもつたいたくなく水使えないんですね。歯を磨くなんてことはほとんど誰もやらない。そうすると口のなかには菌がたまって、それが肺に行つて、別な病気になる。そういうことを説明されています。そういう専門家でなければわからないこと、実際に災害が起きたときには想像もつかないようなことがあるということ、そういうことを学ぶことができるんじゃないでしょうか。

大学としては復興科学センターを設

置したことはご存知ですか？

復興科学センターの中のボランティア部門では、学生さんが、ボランティア活動をしたいうときに、やりたいう気持ちだけでは自分が怪我してもかえって悪いし、地元で要求していることとぴたりあっているのかとか、災害が起きた時に何が一番必要とされているのか、学生として何を今やったらいいのかというノウハウが、今のところないですね。

そういう基準、ガイドラインを、いろんな分野の先生がグループを作つて研究していただきたいと思っています。

しかし、災害つていつおきるかわからないんですね。おきた時にどうするか、学内の手続きやら、大学として、ボランティア活動をするうえでどういうことに注意したらいいのか、きちんと理論付けておかないと。教育の一環として捉える時にはどういうことに注意しなければいけないのか。いろんな問題があると思います。



みんなで記念撮影。「学長」って遠い存在だと思っていたけど、震災を通してとても身近になったような気がします。



表彰式の一コマ。ボランティア本部の活動に、大学をあげて表彰してくださいました。



休日は音楽を鑑賞したり散歩をしたりして、日ごろの激務を癒される。

学生は学生じゃなきゃ
できないことがある。
ひとつのことにのめりこんで、
情熱を注いで。
皆さんの次の世代にも
その意義を伝えて欲しい。

組織としては充分なものにはなっていないかったけど、7・13水害から続いて活動していたんですよね。
自分たちのもっている力を、中越の人の助けに使ってもらおうと、活動がだんだん芽生えてきたな。震災になつてなお、具現化してきたのはすばらしいと思う。直接じゃないけど、みなさ



こうのしょうじ

新潟大学理事
河野 正司

歯学博士。
自らのご研究を通して、高齢者の福祉に貢献することを目指されている。



んがコーディネーターでやってきたことも大事。コーディネーターしてくれることで、「私のもっている力を発揮したい」、「地域の人にお手伝いしたい」、「困っている人にお手伝いしたい」、でもそれが「なんだかわからないし」、「どうやってそこへいったらいいか、どうやってそういう方と接したらいいかわからない」という学生さんも大勢いると思うんですね。それには、皆さんのやっているマネージメントが大切。

しがらみの無さを活かす。

学生さんは学生じゃなきゃできないことがあると思う。たとえば、NPO法人だったらその仕組みの中で、いろんなしがらみに左右されて動くわけだけど、学生さんたちはほとんどなんにもないんですよ。そういう所では、学生さんの活動が活きるんじゃないですか。年齢層の違う人ともどんどん交流して、そういう活動の間を学生さんがつなぐといんじゃないですか。

ひとつのことにのめりこんで情熱を注ぐ。これは社会に出るとなかなかできない、自分の中にあるエネルギーを注ぐ。そのようなエネルギーを爆発させようとした体験は大切だと思う。

例えば、大学で行ったおにぎりボランティアでは、15分で500個とかができたでしょ。ものすごいエネルギーを象徴するひとつ。「やりたい」、「な

にか役に立ちたい」と思っている学生さんがあれだけいるというのはすごい。皆さんの次の世代にもそういうことやることの意義を伝えて欲しい。

なにかやったなということが感じられるのが20代。私自身も20代というのが一番すばらしい時期だったと思う。そんななかで、やってきたボランティア中越の人に対して大きな働きに打ち込めたというのはすばらしい。新潟大学の学生さんがそういう組織を作ってくれて、新潟大学に入ろうとする高校生さんにも刺激になる。

学内でも、たくさんのボランティアができる可能性はある。

震災にかかわらず広いボランティア、学内でやれることはあるんじゃないかな。例えば愛媛大学では、友達を支える活動をお互い、学生どうしで行っていることがあります。

学生さんたちが、どうやってお互いの悩みを打ち明けたり、解決したりするのかというと、一番話しやすいのは、先輩や同級生。先輩や同級生が助けてあげられるようだったら、お互いに行き合えるんです。

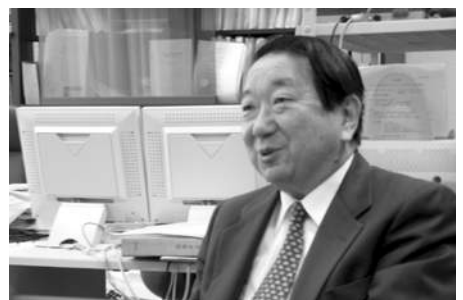
大学にも、何でも相談室や保健管理センター、大学の組織、相談役の先生などいろいろな窓口がありますが、組織になると柔軟に対応できない場合もあるのですよ。

だから、学生どうしお互いが助け合うピアサポートなどの活動を、新潟大学の中でもできてきたらいいなと思ってるわけです。「お互いがお互いを助け合う」心や雰囲気芽生えてくるといいな。

だけど、ボランティア活動なんだから、大学から「こうやりなさい」というんじゃなくて、自然に芽生えてくるのが楽しみで、その芽生えが震災ボランティアで始まったのじゃないかと期待しています。

たとえば、今の新潟大学で目の不自由な学生さんがいたとしたら、黄色い所をつたって歩くというのは不可能ですよ。自転車が放置してあったり、十分に安全が確保されているともいえない。事務の職員が気がついたら直しているけれども、学生から「どうしようか」というのが生まれてくれば。まだ、そういう何か手助けを必要な学生さん、新潟大学にはあまり多くないんですよ。だから、みんな気づかないんだらうと思えますけど。

いくら私たちが水をかけて育てようと思っても、皆さんが育とうと思わないと育っていかないんだから。でも確実に種はまかれて芽が出ているわけだから、育つような環境を我々が作って、大学に「こういうことをやりたい」ということを言っ来てほしいと思います。



仕事に厳しい方だが、理事を募って相談に来る人も多い。この日も来客の合間をぬって取材させていただいた。

サッカーがお好きで、自らもプレーをされる。ピックスワン（新潟スタジアム）で試合をしたこともあるそうだ。

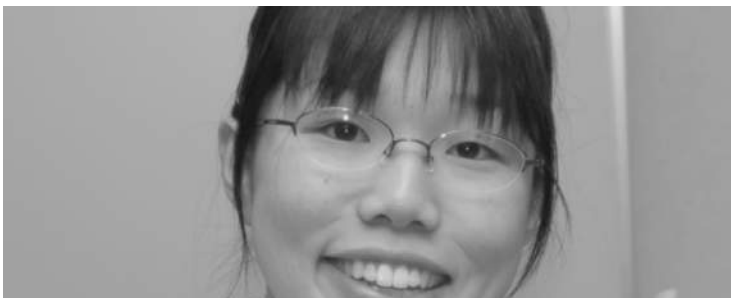
ボランティア本部立ち上げの時、実は大変お世話になったのが河野理事。強烈に後押しをしてくださった。感謝。

自分が何かしたいっていう、
誰かの為にとかじゃなくて、
「やってると安心する場」を
大学の中で作りたい。

コーディネーターは情報を
伝えるだけじゃない！

私がボランティア本部に入った時は、全然コーディネーターという言葉自体を知らませんでした。現地の人に電話して、今、どういうことをして欲しいかという情報を得て、それを学生に伝えるっていうことを取りあえずやればいいのかなど、それ位のイメージ

ジでした。けれど、実際にやってみてコーディネーターは難しいと感じました。例えば、交通手段がなかった時、交通手段があればすごいこっちもバンバン後押し出来るんですけど。なかなか交通手段っていうのがネックになっちゃって、行きたい気持ちを繋げられない時がありましたね。他にも、ボランティアをやりたいていう人がいても、ニーズがなくて、やれることがな



なかいみさ

新潟大学法学部2年
中井 美紗

本部のミーティングでは主に記録を担当。チャリティバザー、写真展等のプロジェクトを企画。本部ではみんなのお姉さんの存在。



いつていう時がよくありました。そのときは、どうしようもできなくて、『また連絡しますから』っていう感じになっちゃうので、そこは、『あー、もつたいないないない』って思っちゃいます。

でも、一年経ってみてコーディネーターは伝えるだけじゃないと思えました。伝えるのは別に、インターネットを覗けば誰でも出来ることだから。それを掲示とか色々な方法で伝えて、更に、その伝えたことに応えてくれた人、『私、やりたい！』って言うってくれた人の、やりたいっていう気持ちをも、ポン！と押し出すっていうか、後押しできるようなことがコーディネーターだど。さっきの例だと、交通手段がなかったら大体電車とかバスで行つてもらう場合が多いので、時刻表を使つて付近の駅を調べて『この駅で降りて』とか、地図を渡して『こういう風に行くんですよ』っていう、ナビゲーションをしてあげると、『よく分からないけど、一応行ってみようかな』っていう気は多少高まると思うので。こういうことで、『え、交通手段がないの?!』と思った人でも行ってもらえるようになるかなって思ってます。

なくても向こうの人が「じゃあ、私こういう人を知っているので教えてください」って言うって紹介して下さって、そういう人と連絡を取って、また情報やモノを提供して頂いたり。今までたくさんのプロジェクトをやつて、「よし、ここまで出来てれば、問題ないぞー」という感じに、おかげさまでなりました。

中立的な立場に立つと、見えてくるものがある。

何かを決めていく際に、議論を戦わしているのは、すごいいい事だと思わんですけど、結局、問題の解決にならないのが、こう中立的な立場に立つてると分かるんですよ、なんとなく。その時つてどちらかの立場に結構寄つてることが多くつて。じゃあ、その寄つてる方を試してみればいいじゃないっていう。やつぱり、やつてみないと分からない事つてあると思うので。中立つて言うのは、自分があんまり意見を言わないんですよ。FGで書いてる時は極力意見を言わないようにして、「あーなるほど！なるほど」つて色々意見を聞いて、あ、じゃあこうしたら一番みんな納得出来るかなつて。最終的には、「あそこに持つていけばいいじゃん！」つていう感じになつてるような気がしてね。その、最後に自分で決断を下さなきゃいけないつていう

のが、ちよつとまだ、やつぱりプレッシャーがあつて嫌なので、私がFGをやつてるとか意見を言わないようにしているのですが……。

本部は大学内のオアシス。

ボランティアを始めた当初は、やつぱり、相手の為に何か役に立ちたいつていうのが当然ながらあつたんですけど、今はそれよりも自分が楽しいつていうか、自分が何かしたいつていう、誰かの為にとかじゃなくて、やつてると安心というか。本部が居心地いい、といえば居心地いいんじゃないんでしょうか。なんか、お茶の間というか。暖房が揃つていたりとか、そういう面で居心地がいいつていうのもあるんですけど、そういうのだけじゃなくて、ここにいれば、誰かに必ず会える感じがするつて。なんか、話し相手探しに来る！みたいな感じあるんですけど。後は、多分この今インタビューの最中にもかかわらず、こんなに笑つているという、この雰囲気がいいんだと思うんですけど。言葉に出来ないけれども、好きな雰囲気なんだ、今のこの状態。なんか、学部つて勉強する所で、あんまり居られる場所がないからねえ。まあ、大学内のオアシスつてことで。



会議で記録をしている中井さん。会議の内容をきれいに整理してまとめてくれることで、討論がスムーズになった。



中井さんの企画した「チャリティバザー」。大学内での企画だが、たくさんの気持ちが集まった。



周囲に気を配ることを忘れない中井さん。みんなを気遣い、整理整頓や掃除をしている。

自分がどうしても出来ないこと、
だから誰かがやってみてほしい。
皆で協力し達成したものが、
結果的に僕の実現したかった目標であるならば、
それは僕自身の達成にもなるからです。

「ボランティアをしよう」と
思っていたのではなく、
自然とやっていたような気が
します。

ボランティアについて特別な意識
はありません。高校生のときは近くの
特養で毎年御祭りの手伝いをしていま
した。仲の良い保健の先生に「藤本君、
行ってみない？」って紹介されたんで

す。友達と一緒に、皆で遊びに行くよ
うな感覚でしたね。だからボランテイ
アをしているという感覚はありません
でした。自分のやっていたことが、た
またまボランティアだったという感じ
です。

震災ボランティア本部へ入ったきつ
かけは、小学生のときに体験した阪神
大震災です。当時は小学五年生だった
から、ボランティアや手伝いは出来ま

せんでした。でも、自分が何も出来
なくて悔しかったのは覚えています。
ずっと覚えていたわけではないけれ
ど、心の奥にはあった。だから今回の
地震で同じ境遇に会っている人がいる
ことを知って、「お、小五のときに
出来なかったことが、流石に今は大学生
だし、何か出来るようになるかな」と
思いました。



ふじもとりゅうた

新潟大学工学部4年
藤本 隆太

工学部福祉人間工学科に在籍
する4年生。新潟大学プレ
スそよかぜの記者としても活
動。2006年4月から大学院
へ進学予定。



「とりあえずあそこに行けば、誰か喋る相手がいる」っていう状態を作りたい

活動していく上で心がけていたのは、スタッフの皆と仲良くなること。僕は人と仲良くなるのが好きなんです。最初誰かが本部に「知らない振りをしてほしい」という張り紙を張っていました。あれはもつともで、良いことだと思っただけですが、実際に実行するのは結構難しいものです。だから自分が、皆が仲良くなれるような良い雰囲気を作りたいたいと思っただけです。具体的には、まず自分がいつも友達を作る感覚で順番に友達になっていき、そして僕を経由してその友達同士も仲良くなっていこう。そうやってどんどん輪が広がっていくような状況を考えていました。本部に居るときは皆と仲良く喋るようにしていましたね。何をすることも喋ることで重要ですから。人と仲良くなるにも、これがキーポイントです。また、仲良くなることで、皆が本部に来やすい雰囲気を作り出すことが出来るのではないかと考えていました。

コーディネーターって何？

震災ボランティア本部の活動内容は「ボランティアコーディネーター」ですが、「コーディネーター」というものに

対して、実は、まだ僕自身の明確な答えはありません。漠然と「そっと背中を押す」という概念を持っていて、最初はそれに納得していたのですが、やればやるほど分からなくなってきました。何をすれば背中を押すことになるのか？地図を作った案内をすれば確かに背中を押すことになりませんが、果たして本当にそれだけなのか？本人の代わりにその環境を作ったあがるのがコーディネーターなのか？ただ人員を割り振るだけがコーディネーターなのか？そういう風に考えていくと、「コーディネーターって何？」ってなりますね。だから、僕自身の明確な答えは、まだ出ていないんです。

リーダーシップを取るのは苦手

僕はリーダーシップを取って活動するのが苦手で、どちらかと言えば、二番目が好きなんです。また、そういう役目のほうが自分に向いているとも思っています。色々な活動をするのが好きで、これまでトップに立つこともありました。皆を引っ張っていくというよりは、皆が間違えないように配慮するのが僕のやり方でした。でも、それはトップがやることではないなという感じがして・・・だから僕は二番目が良いんです。スゴいずるいんだけど、自分がリーダーになり何かを実

現するのって、僕には出来ないと思います。自分には人を惹きつけ実行して結果を出すことができないから、それを誰かにやって欲しいんです。そして僕はその人や協力してくれる皆を「二番目」としてサポートします。皆で協力し達成したものが結果的に僕の実現したかった目標であるならば、それは僕自身の達成にもなります。実現させたいことを実現させるのが僕の人生だと思おうのです。

震災ボランティア本部で活動してきた中で何が変わったかはまだ分からないのですが、本部の中の自分の位置がどんどん変わってきているのは実感としてあります。この本部は今まで代表者をつくらず、「トップがない自由な組織」として活動してきました。しかし、最近では徐々に階層が出来つつあるような気がします。だから、そうじゃないよって事を分かってもらいたいですね。上の人に聞くという体制をなくし、後輩達にはホントに自分勝手に動いてみてもらいたい。「藤本さん、何でこんなしてくれなんでしょうか？、俺しちゃいましたよ。」みたいな。そんな感じの団体にしたいなって思います。「長老に頼るな」ってことかな。だって、みんな力あるんだから。



明るく優しい性格で皆から慕われるボランティア本部の「お兄さん」的存在です。



報告書の作成と卒論準備は同時進行。本報告書作成にあたり、インタビュー技術ではみんなの「お手本役」になりました。



子どもたちが大好きで、現地でも子ども達と一緒に遊びました。でも、恥ずかしがり屋さんです。

新潟大学学生部学生生活支援課
佐藤課長と石坂係長。

私たちを直接支えて下さっている、
学生生活支援課のお二人に
お話を伺いました

コーディネートで一番必要なものは、
ニーズに対して対応できるかだと思います。



やりたいという意向が伝わったから、

一緒にやろうという気になった。

石坂 それはタイミング的に言うと、
確か地震が起こる前の日くらいに水害
のボランティアの経験を活かして何か
をやりたいという話があったのです。
それで大学としてできることをやろう
と言っていたら次の日に地震があった

のです。いいことだなと思いました。
積極的に学生が自分たちでボランティア
をやろうということだから。
佐藤 本部の立ち上げについては私の
ところには河野理事から電話がきたの
ですよ。「ボランティア活動を全学的

さとうしょうじ



モットーは「清く、正しく、美しく」と、多言多実行。だが上手く行かない。(自称)。とても学生のことを想ってくれている。

佐藤 正司

新潟大学学生生活支援課 課長

長い大学勤務で初めての学生支援に当たっています。ですから、毎日、新鮮であると同時に驚きの連続です。

驚きは、何も良いことだけではありません。親離れ、子離れできてない親と子、自立不全で、打たれ弱く、すぐ切れて、無気力な学生がなんと多いことか。

そんな中、サークル活動やボランティア活動に参加する輝く目を持つ学生に触れました。夢を持ち、その夢を語ることを勧めています。

にやりたいという学生がいるので話を聞いてやれよ」と。ところが余震が続く状況の中で学生の行きたいという気持ちちはわかるけれど、安全性が確認できない。しかし、近いところに困っていることが起きている。金銭的にも人的にも何かやれることがあるのじゃないかというのがあって。学生自ら「やりたい」と。その意向が伝わってきたから私は躊躇無く、一緒にやりましょうという気になった。非常にその点では嬉しかった。ボランティアをきれいごとのみる面があるけれども、ボランティアをやったおかげで傷つくこともあるし、必ずしもいいことばかりじゃないと思います。

石坂 文句を言わずに一生懸命働くのがボランティアかな。それ以外にも、今までボランティア本部の人たちの活動を見ていく中で、ボランティアというのは必ずコーディネートする人が必要なのですね。わからない人がたくさん集まったときに收拾がつかないの、段取りコーディネートする人が必要だと思います。コーディネートで一番必要なものは、ニーズに対して対応できるか。今回の震災の報道でも水が必要だということと山ほど届いたりして。情報は常に動いているのに正しく報道されないから、必要でないものがどんどんきて、物資が届くころには必要が

なくなっているのをどう発信していくか。これは困難だけれど大切な問題だと思います。

失敗してもいい。

これからも一緒に。

佐藤 実際一つ引いて皆さん見ているわけですよ。皆さんがいるんな知恵を出してやっているじゃないですか。それが成功しようが失敗しようが、失敗してもいいのですよ。だからそういった意味で全部うまくいって成功しましたというのが一番いいけれどもそれに応えることはないと思います。みんな考えて色々工夫してやれる範囲でやると、このシステムが好きです、私は。冷静に考えた時に、学習する場が大学であるわけだから、ただやっただけではなくて教育的な視点で整理して、学生に学んで欲しい。こういった側面は大学であるがゆえにあるのだと思います。今回の震災だけではなくてあらゆるボランティア関係に対して中心的な役割でやっていくという動きがあるようで、こういうふうにつながってきたということについて言えば、一年間やってくる中できちんと学ばべきものを学んで、今後の方向性も出してきている。他人事ではなくて自分のことのようにうれししいし、今後一緒に続けたいと思っています。

石坂 震災ボランティア本部の活動自体が自分で企画して自分で行うというのがちょっとメインになりすぎたかなという感じはします。ボランティア本部というのはやはり、一般学生がボランティアに参加しやすい環境を作り、ボランティアが必要だということを発信して、どうやって行くかわからない人に「こうやって行くのですよ」と情報を集めて発信するのが役割なので自分たちで企画して自分たちでやるというのがどつちかというイメージになってしまったかな。これから本部に必要だと思うことは、いろんなボランティア団体とか地域のひとかと行政を含めて交流を深めて、いろんな情報を集めて、それをいかにみんなに発信していけるかということだと思います。一つの大きなテーマとしては地震を風化させないというのがあります。ずっと継続していくということが大切だと思います。あとは震災に限らず広い意味でのボランティア本部としてはいろんなことにチャレンジしていければいいかなと思います。全く何もなかったところから自分たちだけで作り上げていくところがすごいと思います。ぜひ今後もボランティア本部を拡大してがんばっていただかないと。

いしざかよしなり



座右の銘は「発想の転換」。自分の意見に固執することなく、他人の立場に立つて発想してみるとより良い意見に辿り着けるのではないかと考えている。

石坂 良成

新潟大学学生生活支援課 学生係長

窓口で学生と対応をされていて、最近、強く感じるがあります。それは、学生が物事を「正解」か「不正解」の2つしかないと思っているのではないかとということです。

物事について「完璧な正解」を求めると、ちょっとでも誤りが含まれていけば全て「不正解」としてしまふ。でも僕は、一つの物事の中に「正解」と「不正解」が混ざり合いながら流れて行くものだと思います。本当に大事な部分が正しければ、枝葉末節の部分は、多少の間違ひがあっても「OK」というくらいの大らかな気持ちを、学生のみなさんに持って欲しいと思っています。

最初に動いた人

あのとき、自分に何かできることがあったとすれば、 「動く」ということだけだったと思う。

新潟県中越地方を大きな揺れが襲ったとき、私は一人で新潟市内のアパートにいた。自分の身に何が起きているのかわからず、事の大きさを知ったのは揺れがおさまってから数分後のことだった。とても怖かった…。一人で心細かった…。でも、もっと怖くて、もっと心細くて、もっと悲しい現実が起こっていた。

20年と少し生きてきて、天災の被害などまったく知らない私は同年7月に起きた「7・13水害」の心の傷がまだ癒えていないところに、この地震に遭遇することとなった。

色々な思いがあのかのときのようにめぐった。

「自分にできることはなんだろう？そもそも、できることなどあるのかな？」―それに深く悩まされていた日々。何もできなくて、一つも力になれなくて、ただ胸にあつたのはいよいよの思いだけだった。

そして、今回の中越地震でも何ができるかなんて、全然わからなかった。

だけど、そんな中で一つだけ思い浮かんだのは7・13水害のとき一緒に活動した後輩たちの顔だった。その顔が思い浮かんだとき、「動く」と思った。まず「大学にいつてみよう」「そう思うて、何か自分にもできることから始めてみよう」と思った。そう思えたことが、7・13水害のとき私と決定的に違つところだった。

それから仕事の関係で活動に関われなくなつてしまつた自分を悔いる気持ちもあつたが、大学の活動を聞くにつけ、その一端に関われたことに感謝している。

何か動き始めるときには、きちんとした理由が必要なものもあるのかもしれない。

でも、心に芽生えた「思い」を動かしていくときには下手な理屈は必要ないと私は思う。

～新潟大学震災ボランティア本部設置までの四方山ばなし～

2004年10月は、新潟県中越地震以外でも、全国各地で台風の影響で水害を受けた地域が多数ありました。地震による救援物資の必要性も生じましたが、それ以前に起こった水害の物資不足も深刻な状況でした。地震後、マスコミの報道は地震関連のニュースが多数を占めており、人々の関心も、地震直前に起こった水害に対して、薄れはじめていたのを記憶しています。

そんな中、卒業生の佐野智香さんをはじめ、新潟大学大学教育開発研究センターの津田教授、加藤助教授たちが、浜口センター長の協力のもと、教育担当の河野理事の部屋に向かい、「ボランティアセンター」の設置に協力を求めました。

そしてすぐに河野理事のご賛同をいただき、その場で設置することが決まりました。確かに大学は「縦型の組織」という印象を受けがちですが、このようなとき、いわゆる「人のつながり」で迅速に対応できる「柔軟な組織」ということを実証した事例でもあります。皆さんの「あたたかさ」と「速さ」に感謝です。

さの ちか

2004年、教育人間科学部卒業。大学在学中よりNPO活動、公民館活動などに参加。現在は「身の丈サイズ」をモットーに、多くの笑顔に出会うため修行中。

佐野智香

新潟大学卒業生



第二章

かかわりづくり



- 新潟大学震災ボランティア本部ができるまで
- ルール作り
- ホームページを作ろう
- たくさんの人を巻き込む情報発信
- 情報伝達ノート
- ファシリテーショングラフィック
- マスコミと上手く付き合う方法
- 誰が来ても安心な工夫
- お茶の間づくり
- 支部を作ってゲリラ拡大作戦

コラム：「神戸」のとき、子どもだった人

にいがただいがくしんさいぼらんていあほんぶ

新潟大学震災ボランティア本部

2004年10月29日に、学生をはじめ、OB、職員、教員が力を合わせて立ち上げた。



まずは場所の確保と物資の受け入れから始まった。みんな、快く提供してくれた。



当初は集まった物資の一部を水害のあった兵庫県豊岡市や出石町に送っていた。



新潟大学震災ボランティア本部ができるまで

はじめは、誰もが他人だった。

まずは、現地の情報が知りたいなあ。

救援物資を送りたいなあ。

一体何が必要なのか知りたいなあ。

学生に出来ることって何かなあ。

「ボランティアをしたい」という気持ちを形にかえる

お手伝いをしたいなあ。

学内外に情報発信したいなあ。

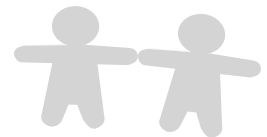
大学をうごかしてみたいなあ。

大学に居ながらにしてボランティア活動したいなあ。

色々なことをみんなで考えたけど、想いはみんな一つ。

「○○○できたらいいなあ」

からのスタートでした。



震災発生

ボランティア本部活気グラフ

何かできないかなあ?!

人材呼びかけプロジェクト立ち上げ

- 学生の募集
 - ・コーディネーター
- 物資収集
 - ・学内外からの物資収集・管理・発送
- 大学との交渉
 - ・本部設置にあたり場所提供の交渉
 - ・アドバイザー教員の配置 など

震災ボランティア本部の設置・活動スタート

- ボランティア本部学生スタッフの募集
 - ・コーディネーターの募集
- 物資収集継続
 - ・学内外からの物資収集・管理・発送
- PC・電話の設置
 - ・様々なところに情報がある。それらに対応する。
- 情報収集（現地）
 - ・現地の情報収集をする。電話で現地ボランティアセンターに連絡
<ニーズ受付カード>
- 情報発信
 - ・収集された情報をメールマガジン・メーリングリスト・ホームページ・
掲示板で発信
- 現地ボランティア学生の募集 <ボランティア受付カード>
 - ・誰がいつ、どこにボランティアに行ったのかの管理
 - ・ボランティア参加人数の把握
- ボランティア活動報告
 - ・どういったボランティア活動をしてきたのか報告
 - ・現地の情報を知る
 - ・今後の活動の参考に
ボランティア報告書
- 危機管理
 - ・現地でボランティア活動する学生に対して、危機管理をする。
<危機管理マニュアル>

活動展開

3章につづく

- 大学にいながらにしてのボランティア企画立ち上げ（「何ができるか」ミーティング）
 - ・自らボランティア活動を企画・運営する
- 大学をうごかす
 - ・学生だけではできないようなことは、大学とのコラボ
（新潟大学の例） ・バス出し

流動的な組織へ！！

- 誰でも、入りやすく出やすい組織へ

柔軟に動く組織、 そして場を作るには、 ちょっとしたルールづくりが大切です。

「あなた誰って顔をしない」

こんなルールだけを、最初に私たちは作りました。



大滝優果

おおたき ゆか
新潟大学教育人間科学部
4年。2006年4月から
本学大学院に進学予定。

誰が来てもいい

「あなた誰？っていう顔をしない」
震災ボランティア本部のカウンターの内側にはこんな張り紙が貼ってあります。これはカウンターで学生のボランティア受付けなどの応対をするスタッフへの注意書きです。震災ボランティア本部は誰が来てもいい場所です。誰かの役に立ちたいなど思っ、勇気を出して、震災ボランティア本部のカウンターに足を運んだのに、スタッフに「この人誰だろう？」っていう顔をされたら嫌ですよ。ね。だから、初めて会う人であっても、いや、初めて会う人だからこそ、笑顔で迎えるように心がけるのです。

また、震災ボランティア本部の掲示板のあたりを何度も行ったり来たりして、こちらの様子を伺っている学生さんもいます。「興味はあるんだけど、あとちょっとの勇気が出なくて・・・」という気持ちはよくわかります。そんなときはこちらから、「こんにちは」と声をかけます。
名札も工夫のひとつです。

震災ボランティア本部のスタッフになるには、誰かの承認は必要ありません。自分がやりたいと思っ、

登録さえすれば、本部のスタッフです。登録のときに、必ず名札を作ります。

震災ボランティア本部を立ち上げた頃は、たった日本部に顔を出さないと、翌日にはスタッフが三人も増えている、ということはよくありました。そんなときに名札が役に立ちました。もちろんお互いに自己紹介はしますし、覚える努力はしますが、一時期は百人を超えるスタッフがいたので、正直覚え切れません。名札があれば、「○○さん、こんにちは。」「○○さん、ありがとうございます。」など名前を呼んで会話することが出来ます。そんなことは大したことないことだろうと思われるかもしれませんが、この些細なことがかわりづくりには大事なのです。初めは学部や氏名を書くのですが、仲間と打ち解けてくると、あだ名に書き直したりしていました。名札はコミュニケーションを円滑にする鍵となる道具です。

震災ボランティア本部での関わり方は人それぞれです。毎日来れる人は毎日来て活動をするし、毎週水曜日しか来れないという人もいます。それでいいのです。みんなが同じ時間に集まって同じことをする必要はありません。関わるときだけ真剣に取り組めばいいのです。

開放するルール作り。
私たちは、
こうして仲間を増やしていきました。

初めから制限をつけない。

そして、学生らしく自由な発想で。

誰がはじめてもいい

震災ボランティア本部では、やりたいことをやりたい人がプロジェクトとして企画し、活動しています。プロジェクトをやるかどうかは本部の代表者が決めるものではありません。そもそも、本部には代表者はいません。「やりたい人がやる。プロジェクトの理念や内容に共感した人が仲間に加わってプロジェクトが動き出す。」それが新大震災ボランティア本部流なのです。

メーリングリストで呼びかけてお昼休みに集まり、アイデア会議も行いました。自分がやりたいことを付箋に書いて、模造紙に貼ります。

■「おじいちゃんとおばあちゃんの話し相手になりたい」

■「子どもたちと遊んで元気になって欲しい」

■「被災地には行けないから、大学で募金活動をしたい」

いろいろなアイデアが生まれました。その模造紙は誰でも見ることが出来る場所に掲示しておきます。そして、付箋のところに「企画進行中」や「仲間募集中！」とコメントを書き込んでおきます。これによって、昼休みの会議には参加できなかった人でも、放課後や翌日にこの掲示板を見れば、プロジェクトに

参加できるのです。もちろん新たなプロジェクトのアイデアを出すのも大歓迎です。

また、このアイデア会議には、震災ボランティア本部のスタッフ以外の人も参加できます。会議は本部のカウンターの前の小さなホールで行っていました。通りがかった人が興味をもったら、自由に参加しているのです。

やめてもいい

「本部のスタッフをやめてもいい。」これもルールの一つです。先に、本部との関わり方は人それぞれと述べましたが、本部との関わり方は自由なのです。無責任になってポンポン物事を放り出すのは良くないけれど、責任を感じ過ぎたり、自分ひとりでだけ背負ったりする必要はないのです。

始めるのがその人の自由なのだから、やめるのもその人の自由。仕事ではないのだから、失敗を恐れなくていいし、ずっと続けなければならぬという義務はありません。やめるのも続けるのもその人の意思で決めるのです。

樋口 瞳

新潟大学理学部3年

ひぐち ひとみ

本部ではwebとIT機器担当。
抜群の行動力で、いち早く本部
webサイトを立ち上げた。



本部PC。通称「ボランティア2号」(2台目です)本部情報の管理だけでなく、情報発信の要として活躍しています。



IT関係の作業は自宅に帰ってから行う。デザインセンスも、キラリと光る。



大学のホームページとリンクして、誰でもアクセスしやすくなっています。

情報を『公益』に ホームページを作ろう 本部ウェブサイト <http://www.nice.or.jp/~nvc/>

ウェブサイト＝ホームページを用いる最たる利点は、情報の共有が容易であるということです。全員が同じページを見れば、同じ情報を同じ密度で瞬時に共有できます。文章だけでなく、画像や、動画、場合によっては音声などを、元の情報をほぼ劣化させることなく、届けることができるのです。

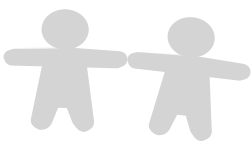
従来の紙媒体や電話、現在普及しているメールなどでも、同様の効果は得られますが、ウェブサイト最大の特徴は、アドレスさえ間違わなければ、世界中どこからでも参照できるといえます。電話やメールは、送信者と受信者が存在し、受信者は常に受身であり、限定的です。しかしウェブサイトはたとえ地球の裏側においても環境さえあれば、見たい人が見たい時に同じ情報を共有でき、また、関連する内容のウェブサイト同士を結ぶことで、より効率的・能動的に関連情報を得ることができるようになっていきます。

新大震災ボランティア本部のウェブサイトにて特に要点としたのは『情報の還元』です。震災状況の詳細情報は、それこそ県や研究所の公式サイトを見た方が確かな情報を得られます。私たちが伝えられる情報――それは、ノウハウでした。震災ボランティア本部は、学生が学生の為に

自分たちで作りに上げたボランティアコーディネート組織です。0から積み上げてきたそのノウハウを、できるだけ公に提示し、より多くの人がボランティア活動に参加できるようにすること。それが、私たちの配信できる『情報』でした。ですから、本部サイトでは当本部でのボランティア登録の方法を写真つきで表示したり、必要書類や活動報告書類がダウンロードできるようにしています。

また、こうしてウェブサイトにしておくことで、私たち自身が情報を保存できるという利点もあります。なぜなら、ウェブサイトは保存しているサーバーが壊れたり、管理者に削除されない限り、ウェブサイトのデータは半永久的に残り続けるからです。情報の共有、還元、及び保存。ウェブサイトは主にこの三つに威力を発揮します。それは決して、無駄にはならないでしょう。

また、こうしてウェブサイトにしておくことで、私たち自身が情報を保存できるという利点もあります。なぜなら、ウェブサイトは保存しているサーバーが壊れたり、管理者に削除されない限り、ウェブサイトのデータは半永久的に残り続けるからです。情報の共有、還元、及び保存。ウェブサイトは主にこの三つに威力を発揮します。それは決して、無駄にはならないでしょう。



中井美紗

新潟大学法学部2年

なかい みさ

本部ではコミュニケーションマネージャー(コミM)を担当。



携帯電話で情報をいち早くキャッチ。なかなか集まらなかったり、忙しい方には便利です。



中井さんも、コンバを計画する際にMLを活用した。メンバーの中では頻りにメールが飛び交う。



ブログで日々の情報を発信。書き手だけでなく、誰でも参加できる仕組みが巻き込みの秘訣。

しっかり伝えよう。 たくさんの人を巻き込む情報発信。

ボランティア本部運営の生命線とも言えるのが、情報収集・発信の手段です。特に情報発信という点ではアナログにデジタルに様々な手段を活用しています。

たとえば…

本部前の掲示板

ここにはボランティア情報をはじめ様々な情報が掲示されています。震災直後は市町村ごとのスペースが設けられ、毎日情報が更新されました。パソコンで作成された文書だけでなく、手書きの情報も掲示されており、温かみのある掲示板になっています。

メールマガジン

不定期に発信されるメールマガジンにはボランティア情報が沢山盛り込まれます。指定アドレスに空メールを送るだけで簡単に登録でき、様々な情報が送られてきます。

メーリングリスト(ML)

本部スタッフの大半は登録しています。予め登録しておけば、一通のメールで登録者全員に同じメールが送付されます。ミーティングの日時などの重要な連絡からコンパのお知らせなど様々な場面で役立ちます。

参加型ブログ・掲示板

本部HPにあるブログ・掲示板です。ブログはIDとパスワードさえ覚えれば、誰でもどこでも書き込める活動日誌です。もちろん、ボランティアやミーティングの情報を書き込むのも可能です。掲示板はブログよりももっとカジュアルな場で意見のやりとりにも使えます。これらはHP上のものであり、誰でも閲覧・書き込みでき、本部スタッフ以外の外部団体からの情報や意見が書き込まれることもあり、広いつながりを持つことができます。

新大ボラ本部

ブログ <http://blog.livedoor.jp/shindaivol/>

掲示板 <http://bbs3.fc2.com/cgi-bin/e.cgi/52705/>

みなさん、お気軽に遊びに来てください。

田口美雪

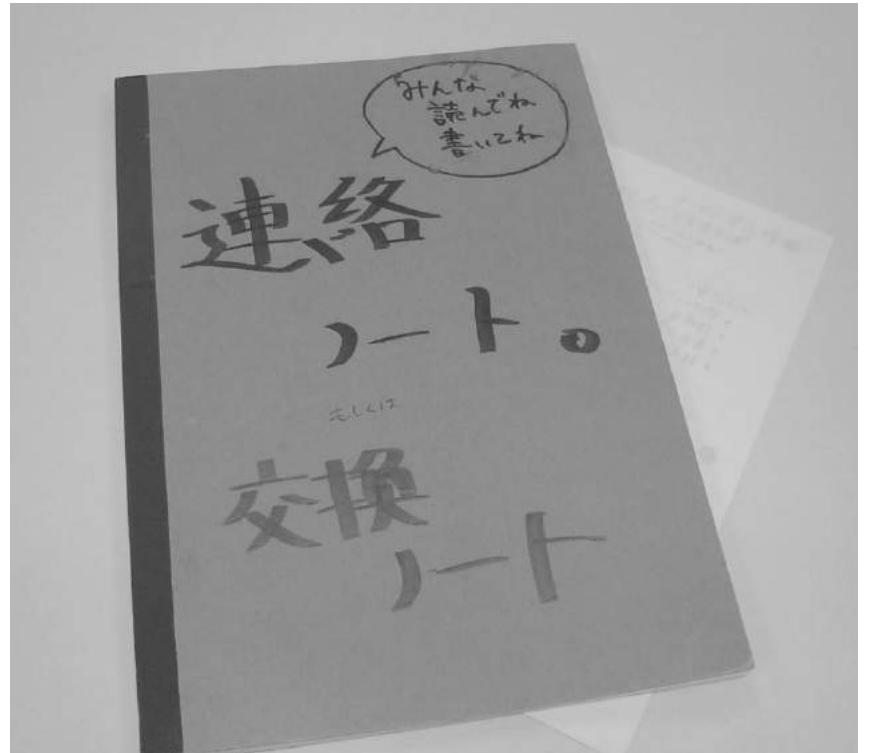
新潟大学人文学部4年

たぐち みゆき

主にカウンター業務に従事し、プロジェクトを進めるメンバーたちを支える。



単なる情報のやりとりだけでなく、つぶやきや気持ちも共有できる。



趣味はお菓子を作ることと料理の本を集めること。田口さんのお菓子はみんなを和ませる。

ちょっとしたつぶやきも大切に。 情報伝達ノート。

連絡用ノートです。やったこと、ひきつがなくてはいけないこと、その他連絡を書き込んで下さい。

○月○日(○)○○:○○

僕は これこれ しかじか うま
うま やりました。(名前)です。
つーかんじで書きましょう！

<ノート冒頭より>

具体的には、質問したいこと、ちょっとした提案、気になったこと、連絡したいことなどを書きます。本部では実際、このように使われました。ほんの一部ですが、ご覧下さい。

11月2日(火) 12:03

16:00ごろから会議があります。(今日です。)場所は、ボードうら。

11月2日(火) 17:50

A棟の入口にある掲示ボードが教養棟正面入口など人通りの多い所にもあるといいなと思いました。

11月4日(木)

みんな、これ、書こうよ...

11月4日(木) 14:00

これかきとときに時間も書いてくれるとありがたいです。けっこう人がいれかわりたちかわりするから、この時間○○さんいたんだなってわか

るし。このとき、一緒にいた人にもっとくわしく書くこともできるし！

おねがいします！

11月5日(金) 15:30

現地に行ける方が、物資を持って行って下さいませ。その際、物資と一緒に、新大生からのものであることを伝え、一緒にがんばっていきましょう！という気持ちを伝えるためのビラを作りたいと思います。そのビラを物資と一緒に現地の方へ渡してもらえたら...と思います。いかが？

11月5日(金) 18:00

ナイスアイデア!!さつそく作りましょうぜ、みなさん!

11月9日(火) 16:45

本部にいる人間が一人だとさみしいです。せめて二人いるとうれしいです。空いている時間があつたらどんどん来てください。

11月11日(木) 9:25

メーリングリストに新たに登録する場合はどうしたらよいのでしょうか?希望者がいるのですが登録の仕方がわからず困っています。

などなど。思いとつぶやきがたくさんつまっています。

中井美紗

新潟大学法学部2年

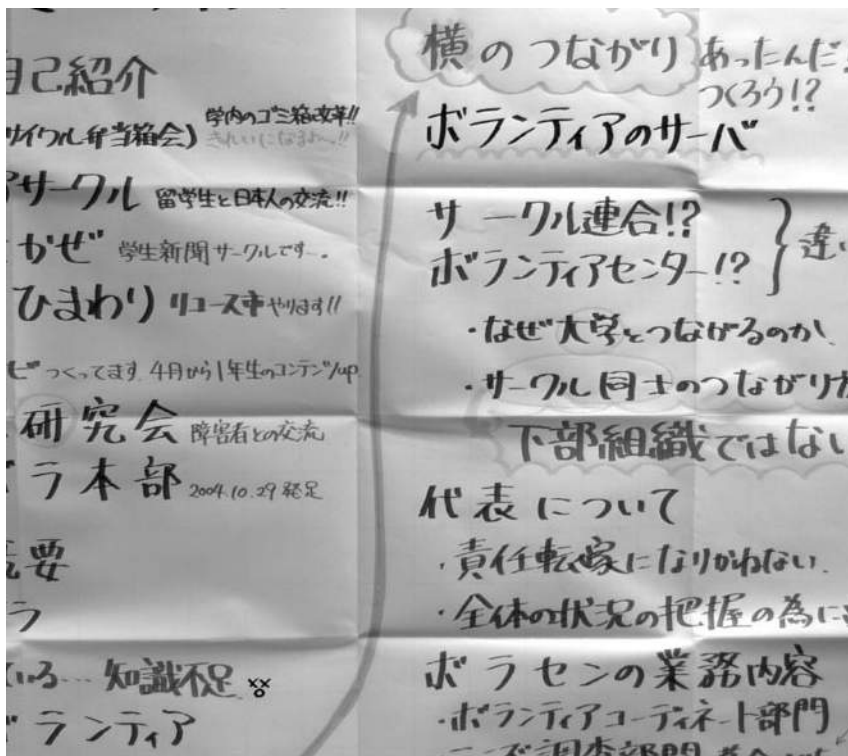
スタッフミーティングでは、中井さんがFG（ファシリテーション・グラフィック）を担当することも多い。情報の共有をいつも心がけている。



片手にマーカーをはさんで、模造紙にダイナミックに描く。これだけでも、なんだか楽しい。



『参加のデザイン part 2』世田谷まちづくりセンター発行の本に詳しく載っています。



模造紙でみんなと共有 ファシリテーショングラフィックって……？

書き方は特に決まっていないので、書き手それぞれの味を出すことができ、書き手・話し手・聞き手が共に楽しみながら話し合いができます。

書き手は話し手の言葉を活かしてそのまま文字にするので、話し手は自分の意見が全員に伝わったという安心感が持てます。書き手は話し合いの内容や速さについていけないときは、書き手自ら話し手や聞き手あるいは進行役に「待った」をかける

ファシリテーショングラフィックとは、書記のような技術です。書記という堅いイメージがありますが、ファシリテーショングラフィックは、言葉だけでなく、イメージや形、図形、絵などを取り入れることで、話し合いをより豊かなものにできます。

話し合いでは聴覚だけを利用するイメージがありますが、ファシリテーショングラフィックによって視覚を通して話し合いの内容を理解することができます。また、話し合いに参加している全ての人が同じところを見るため、共通の記憶を持つことができます。さらに、書くスペースが限られていないので、前の話題を消す必要がなく、遅れてきた人も一目見ればこれまでの内容が分かります。



こともできます。もちろん、話し手や聞き手・進行役が書き手の様子を見て待つこともできます。このように、ファシリテーショングラフィックは話し手・聞き手・書き手の三者、つまり話し合いの参加者全員で一緒につくりあげていくことが特徴です。

安本典生

新潟大学理学部 2年

やすもと のりお

初めはまったくボランティアに興味はなかったが、愛用のMacとWordを武器に書類などをつくりまくっている。



今は簡単にパソコンでオリジナル名刺が作れる。チャレンジしてみよう。



この顔、実はテレビや雑誌に良く出させてもらっています。



TVに新聞、ラジオまで。 マスコミとうまく付き合う方法。

ボランティア本部での活動を発展させるためには、『マスコミ』と上手に付き合うことが大切だと痛感しました。そこで、僕なりの体験をお話します。

◎広められた

『マスコミ』は無料で自分たちの活動を紹介してくれました。また、本部独自で情報を発信しても、ある程度限られた範囲に制限されますが、『マスコミ』は大規模な情報伝達手段であり、広い範囲での情報公開ができました。

◎人が集まった

自分たちの情報を紹介することによって、それに共感した人々を集めたり、情報を共有することができました。情報がなければ、行動への第一歩は踏み出せません。

◎つながった

取材が終わったからと言って『マスコミ』と音信不通というのはNG。つながりを持つことで、次回の取材に備えよう。つながりは、自分たちの活動について定期的に連絡を取り合うなど。このつながりによって「震災という名の写真展」の写真を集めることができました。つながりは意外な場面で役に立つのです。これからも大切にしていきたいと考えています。

しかし、『マスコミ』と関わって、残念なこともありました。

×伝えたいことをありのまま伝えてくれなかった

『マスコミ』は大勢の人々に分かり易く情報を共有するという責務があるため、分かり易さを追求します。そのため、こちらの伝えたい事をありのままに伝えてくれない場合があります。取材から公開まで、『マスコミ』と念入りに打ち合わせをすることが大切だと思います。

×くるのは早いですが、ひくのも早い

世の中は目覚ましく変化しています。災害関連の記事にしても災害が起きて1ヶ月は毎日のように取り上げられますが、時間が経つにつれ記事の量も少なくなっていくものものです。その場限りの『マスコミ』ではなく、長い目をもって『マスコミ』と付き合いしていくことが大切です。

◎うまく付き合う方法

・名刺は必ず渡す：誰が担当しているのか、はつきりさせる。

・資料は必須：相手が要求しなくても、自分たちの活動の全容が分かるような資料を用意しておこう。

・『マスコミ』の宣伝：自分たちがこのマスコミに紹介されたのかを紹介しよう。マスコミの宣伝にもなります。

などなど、ご参考になりましたか？

田口美雪

新潟大学人文学部4年

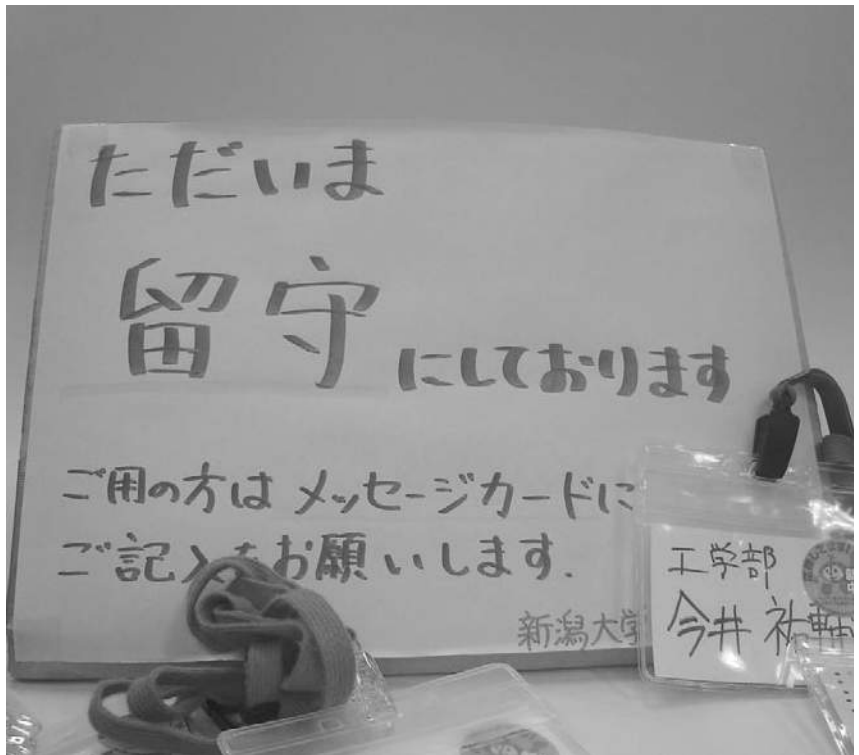
カウンターでの日常の仕事（朝の場合）

シャッターを開ける、メール確認、電話の着信確認、ゴミ捨て、掃除、掲示物の貼り付け、連絡ノートの確認、資料・プリントの陳列、等々。

（朝は、人が来ることは少ないため、雑用が多い）



わかりやすいところにわかりやすく。これって整理だけじゃなくて、誰かを思うやさしさですね。



「誰が来ても安心」、簡単なようだけど、こんな工夫があります。

す。」と書いた看板と紙を用意してからカウンターを離れます。

その2 対応マニュアルを用意する
知らない人と話をするのは緊張するものです。何を言っているのかわからなくなることもあります。そこで誰でも簡単に対応できるようにマニュアルが用意されました。電話用の対応マニュアルや、カウンターで直接話す場合の対応マニュアルなどがあります。何を話せばいいのかだけではなく、対応する際に心に留めておくべきことも書かれています。

その3 資料やプリントを見やすい位置に並べる
カウンターを開けた時に震災関連の資料やプリントを、来た人に見やすいように置きます。閲覧用に震災の写真集もあります。何もカウンターに置いていないと寂しいものです。それに資料などを見えるところに置いておくと、「ここでは震災のボランティアの活動をしています」というメッセージを周囲に対して示すことにもなります。

その4 プロジェクトごとにクリアファイルで整理する
本部のプロジェクトを全部把握しているのは難しいものです。しかし

プロジェクトごとに参加者や物資を募ることもあります。プロジェクトの担当の人がいつもカウンターにいることができるわけではないので、プロジェクトに直接関わっていない人にも対応してもらわなければなりません。募集の掲示を見て来てくれた人に書いてもらうプリントがプロジェクトごとに整理されていると、担当ではない人も落ち着いて対応できます。

その5 精一杯対応する姿勢を保つ
カウンターにいるいろいろな人が来ます。ボランティア本部とは関係のないことを尋ねられることもあります（大学内で道に迷った方がいらつしゃったことも何度かありました）。取材のためにマスコミの方がいらつしゃったこともあったようです。予想もしなかったことを尋ねられたり、思いがけない人が訪ねてくると焦ります。どんな人が来てもおかしくないかと思っていた方がいいかもしれません。どんな人に対して精一杯対応する姿勢を保つことが大切です。自分で対応しきれないようならば、担当の人に連絡したり他の人に相談します。

柳沢直樹

新潟大学経済学部1年

やなぎさわ なおき
ボランティア本部ではプロジェクト等
を検討・企画している。



名札も重要なアイテム。
人の名前って一度にたくさんは覚えられないけど、これがあれば安心。



一年生ながら、本ボランティア報告書編集委員会副編集長。



本部にはいつもお菓子があります。お菓子は本部のメンバーの誰かが足りなくなったらいつも補充してくれます。そんな心遣いがうれしいですね。ちなみに写真のお菓子は、田口さん(本部メンバー)の手作り。ごちそうさま。

いつでも立ち寄れる、 そんな茶の間づくりが大切です。

「ここに行けば、必ず誰かに会える」

重要な部分を占めるのが、本部の雰囲気。「ボランティアをやりたい」という学生が気軽にやれる環境・雰囲気を作ることが大切です。また、学生が気軽にできるという意味から、本部には誰かがいることが望ましいと思います。だって、人がいた方が学生は声をかけやすいだろうし、なによりその学生のやりたいという気持ちをつなぐことができるから。

私たちの本部では、そのような環境づくりに成功しています。「ここに行けば、必ず誰かに会える」。そのような場所が私たちの今の本部です。

もちろんみんな無理に来ているわけではないんですよ。みんな都合が良い時間帯に、ちよつと寄っていかなくていい気持ちで来ます。そして、本部で他のメンバーと色々な話、ボランティアの話から全く関係のない世間話まで話したりする。

ちなみに、お菓子も誰かが買ってきてくれたりするので、それをみんなですつまんでいたり。本部のメンバーの中には手作りのお菓子を作ってきてきてくれたりする方もいます。いつも本当に感謝しています。

こんな風に、本部はそんな強制的

ではなく、堅苦しくなったりしていません。みんなが思い思いに本部に来て、くつろいでいる。そんな居心地が良い場所です。

このような環境は、私たちにとっても居心地が良いし、そしてボランティアをやりたいって思っている学生にとっても声をかけやすい場所となっていると思います。「ここに行けば、必ず誰かに会える」そのような環境・雰囲気づくりが、みんながうまく継続してやっていけるコツだと思いますよ。



安本典生

新潟大学理学部2年

いつの間にか本部にどっぷり浸かってしまったスタッフの一人。



各学部にも、人の集まる場所に掲示スペースを借りて本部前と同じ情報を発信する。



学生食堂も、たくさんの人が集まる場所。普段から、学食のおばちゃんと仲良くしておこう。



大学のキャンパスは広い。そのため、人の集まる場所も点在する。

支部を作ってゲリラ拡大。 こちらから出かけて行って、仲間を作ろう。

大学という所はとても広いところ
です。新潟大学も例外ではありません
ん。

その広い敷地の中にボランティア
本部を設置したとしても、本部を
知っていたり、活用するのは一握り
の学生にすぎません。

もっと幅広い学生にボランティア
本部を知ってもらい、活用してもら
えるように、各学部または、主要箇
所（学生の往来が激しいところ）に
「ボランティア支部」を設置するこ
とにしました。

しかし、それらのスペースを借り
て支部を設置すると、各学部
などの事務との交渉が必要となつて
きます。その点、我々ボランティア
本部は大学との近い存在なので、学
生生活支援課の方に協力していただ
きました。幸い、各学部の事務の方
も支部設置の考えを快く受け入れて
くださいました。

ボランティア支部は、基本的に
無人です。各学部や学食など学生
の往来の激しいところに掲示板と段
ボールで造った机を置きます。ボ
ランティアニーズなどは掲示板に貼
り、資料などは机の上に並べておき
ます。気になるものがあればボラン
ティア本部へ来てもらう形にするな
ど、ボランティアに参加してもらう
よう、工夫を凝らしました。

震災が起こった直後は、とにかく
現地への学生ボランティア派遣の必
要があったため、ボランティア本部
スタッフも、休み時間になるとボラ
ンティア支部に向いて声かけ活動
も実施しました。それでもスタッフ
の人数が足りないため、支部で声か
けをするスタッフを募集したりと、
各学部の学生も巻き込んだの大きな
活動となりました。

本部から支部へ、支部から学生へ。
ボランティア本部と学生が次から次
へとつながっていく、とても有意義
な企画だったと思います。

現在も、いくつかの所で支部が運
営されています。ボランティア発展
のためにどのように活用してい
くか、工夫の余地がありそうです。



「神戸」のとき、子どもだった人

ボランティアで できたこと

阪神淡路大震災から10年後、新潟県中越大震災がありました。阪神淡路大震災の時は、まだ小学校5年生。ニュースの中には神戸などの悲惨な映像と、そこに住む悲しげな表情ばかりでした。子どもながらに、「この人たちを助きたい」「なにかしたい」と思いました。しかし、小学生の僕に出来ることはほとんどなく。

それから、10年。

僕は大学生になり、中越大震災に遭遇。被害の大きさに驚き、そして、小学生の頃のことを思い出したのでした。

「あの日、やりたかったけど、出来なかったあの悔いを、今晴らさないでどうする」

そう、心の中でフツフツと湧き上がるものがあつたのでした。

なにが出来るかも分からず過ごしていたとき、おにぎりボランティアというものを知りました。そこには、多くの学生が参加していました。おにぎりを握れない学生もいるくらいで、大学生は朝が弱いという常識を覆すほどの人でした。

地震から1週間たった日、震災ボランティア本部を作ろうという動きがありました。ボランティアに行きたいけど勇気がでないという人の背中を押してあげようという思いのもと、呼びかけて数十人の人が集まりました。はじめは、何も無い状態。そこから、さまざまなプロジェクトを作り、活動しました。

ふじもと りゅうた

震災のボランティア以外にも、大学内外のさまざまなボランティアに参加する。忙しい身ながらも、相談を持ちかけられると断れない優しい性格。

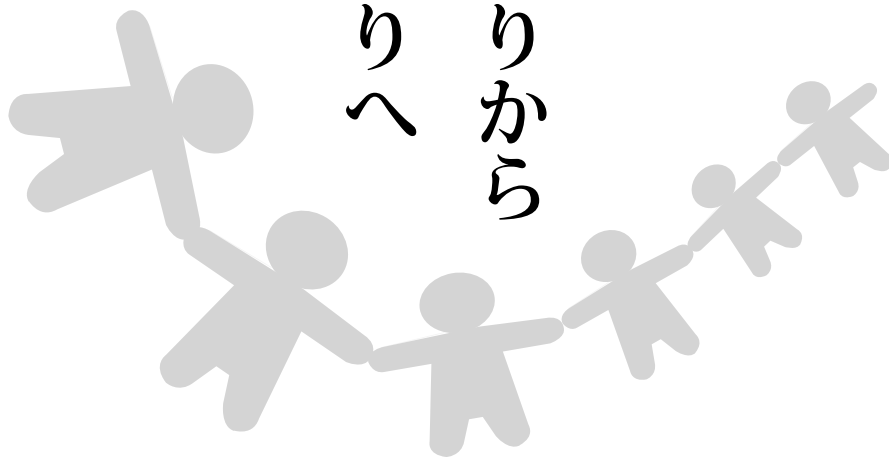
藤本隆太

新潟大学工学部4年



第三章

つながりから ひろがりへ



- やれることから、ひとつひとつ
 - 「私たちでもできる」ことからひろがりへ ～段ボールマイスター～
 - 棚田の保全活動から生まれたひろがり ～掘るまいか～
 - BLOG から生まれたつひろがり ～星空ファクトリー～
 - OB のちからでひろがりへ ～子どもの学びを支援する～
 - 「600人の気持ち」のひろがり ～おにぎり炊き出しボランティア～
 - 大学の講義からのひろがり ～全学共通科目「新潟学」受講生～
 - 研究分野からひろがりへ ～新潟大学積雪地域災害研究センター～
 - 学びの現場からのひろがり ～農学部・被災農地支援学生ボランティア～
- コラム：現地に行った人

■震災という名の写真展

2004年10月23日に新潟県中越地震が発生して、しばらく月日が経った現在でも、被災地では、住民やボランティアの手によって復旧作業が進められています。しかし、マス・メディアでの震災に関する報道が減少し、社会の関心が薄れてきている様に感じます。この状況を踏まえ、地震やボランティアへの関心を高めることを目的として写真展を開催しました。

■記録映画上映『掘るまいか』

新潟県中越地方、山古志村(2005年4月1日に長岡市に編入合併)にある、日本最長の手掘りトンネル「中山隧道」(ナカヤマズイドウ)を描いたドキュメンタリー映画の上映会を新潟大学で開催しました。当日は一人500円の募金と、励ましのメッセージをお願いして、そのメッセージを山古志村に送りました。また『夢ある「山古志」づくりプロジェクト応援団』への登録も募りました。

プロジェクトを立ち上げる。「モチベーション」との戦いだった。

そして、プロジェクトがはじまった。



あのとき、無我夢中だった。
だからつながったのかもしれない。

■チャリティバザー

現地に行けない学生でもできるプロジェクトです。家にあるものを無償で提供してもらい、本部で販売して、その収益金を義援金として、被災者の方々に送ります。2004年12月6日〜12月10日のバザーでの売上は33,336円となりました。この売上金は、社会福祉法人新潟県共同募金会を通して被災された方々に渡されました。

■チャリティライブ

2004年12月10日に新潟大学第1体育館にて市内のダンスチーム・バンド・アカペラ・JAZZなどによるチャリティライブ「LIVE de GoGo in いがた」を開催しました。主催は「にいがたなかよし」という、様々な団体の連合体により構成されています。ライブ内で義援金を募り、集まったお金を中越地震の義援金として寄附しました。

■ペンパル大作戦

新潟県中越地震や7・13水害で被災された方々の多くが、仮設住宅で生活されています。そんな方々と新潟大学にいながらにして手紙という形でつながろう、というものがこのプロジェクトです。現地に行きたいけれど、時間がなくていけないという学生たちが、新潟大学にいながらにして被災した人たちとつながれるプロジェクトでした。

■段ボールマイスター

段ボールマイスターは被災地の方と一緒に、段ボールで家具を作ります(第四章参照)。出上がったものは家具として使えるのももちろんのこと、避難所のしきり板や、仮設住宅の中でも、ちゃぶ台、引き出しなど、色々なものに応用できます。大学内で『段ボールマイスター養成講座』を開催し、2/3以上参加者に、『マイスター証明書』を呈呈しました。

■出張かてきよ

地震の復興作業の手伝いなどでなかなか勉強に時間を費やせない子どもたちを対象に、被災地に赴き、児童・生徒の学習支援を行うプロジェクトです。放課後の個別指導・学習チューター・授業補助など様々な形で学習支援を行いました。長岡市教育委員会を通して、依頼があった学校に対して、学生が出向くという形をとっていました。

「何ができる?!」ミーティング

- 考えを出し合う
 - ・ポストイットに考えを書いて、それを貼る。
- グループづくり
 - ・似ているような考えをグループ分けする。
- 仲間づくり
 - ・考えの似たもの同士が集まる。
- これからどうしていこう??

プロジェクトの誕生・展開

プロジェクト一覧

- 一般学生を巻き込む
 - ・一般の学生の募集 <ボランティア受付カード>
- 情報収集
 - ・プロジェクトを展開していく上で何が必要か?
- 情報発信
 - ・収集された情報はそのプロジェクトだけのものではない。
 - ・情報はみんなで共有 (メーリングリスト等)
- ボランティア活動報告
 - ・どういったボランティア活動をしてきたのか報告
 - ・現地の情報を知る
 - ・今後の活動の参考に
<ボランティア報告書>
- 危機管理
 - ・現地にボランティア活動する学生に対して、危機管理をする。
<危機管理マニュアル>

つながりの誕生

コラボレーション

- 自分たちと同じような活動をしている人たちを巻き込む
- ☆学内団体 (部活・サークル) とのコラボレーション
【新潟大学の例】
がっこみ
そよかぜ
- ☆NPO をまきこむ
【新潟大学の例】
NPO 法人まちづくり学校
新潟県 NPO 協会

やってくれ~

- 自分たちのできないことは助けを呼ぼう
- ☆大学をうごかす
【新潟大学の例】
バス出し
- ☆NPO の助け
【新潟大学の例】
サイエンスキャラバン

うちがやります!

- 長所を生かす
- ☆学内広報
- ☆学生ならではの活動
- ☆コーディネート

- * プロジェクト一覧参考

段ボールの家具作りを通して、仲間を集めて、仲間を育てる。

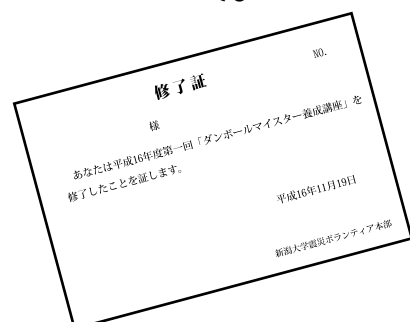
段ボールマイスター

やりたいことを押し付けるのではなく、柔軟に現地に合わせていった。



いがらしりか
いまいゆうすけ
ちばあきこ

五十嵐梨佳さん
今井 祐輔さん
千葉亜希子さん
震災ボランティア本部
段ボールマイスター班



現地で段ボール製家具作りをするという目標のもと、2004年の11月から12月にかけて学内で「段ボールマイスター講座」を開きました。本学内外から学生を集め、段ボール家具作りを体験してもらい、一緒にボランティアをやってくれるボランティアを育てるのが目的でした。講座ではまずちゃぶ台を作って、段ボール製家具の強度と実用性を知ってもらいました。慣れてくると、扉つきの

多目的棚や服を収納する引き出しなど、参加者から新しい設計図が次々と発案されました。コマ、トントン相撲セットなどのおもちゃ、クリスマスツリーも作られ、12月の本部のカウンター前は、段ボール製品の見本市のようになっていました。沢山の学生が参加してくれて、メンバーはぐんと増えました。

一方で、避難所が閉鎖され、段ボール家具の需要がなくなってきたという話が聞かれるようになっていました。段ボールで作ったツリーを持ち込んで、仮設住宅でクリスマスパーティーをやってはどうかという案も出ました。でも、やる機会があるのか。やれるとしたらどこで――。

煮詰まった私たちは、現地の状況をj知るため、12月4日に長岡市のボランティアセンターや悠久山の仮設住宅に行きました。そこで現地のスタッフの方から、仮設住宅でイベントをや

段ボールマイスター プロジェクト

中越地震からちょうど3週間後の11月13日と14日、長岡造形大学で開かれた段ボール製家具作りの講習会に、本部のメンバーが参加した。

この講習会は、1995年に起きた阪神・淡路大震災後にあるボランティア団体が始めた、カードボードプロジェクトがもとなっている。当時、避難所で暮らす人々の間では、家族ごとのスペースを区切る仕切りがないためにプライバシーを守れない、また、生活に必要な家具が足りない、といった問題が持ち上がっており、そこで段ボールで仕切りや棚、机、いすなどを作ったところ、避難所や仮設住宅で大活躍した。中越地震の避難所でもダンボール製家具を活用してもらえるのでは、という狙いから今回の講習会が開かれた。

家具作りを体験して、
中越地震の避難所でも役に立つことに気づいた。

段ボールマイスターたちは、
小千谷市・長岡市の5つの小学校で開かれた
サイエンスキャラバンに参加した。

延べ34人の学生が参加し、子どもたちと一っしょに万華鏡を作った。

「そんな時、本部のブログにあるコメントが書き込まれました。日付は12月5日。偶然にも、現地視察の翌日でした。「今晚は。私達のサイエンスキャラバンでは、各小学校での昼休みを利用したサイエンスイベントを計画しています。この事業に便乗して「家具」ではなく「家」を作って体育館に置いてみてはいかがでしょうか? (後略)」コメント主は、星空ファクトリーの長野親情さん。同団体は、スライムやブーメランなどを子どもたちと作って遊ぶ、サイエンスキャラバンというイベントを被災地の小学校で開いています。」

「マイスター班で今後どうするかを話し合った結果、サイエンスキャラバンに参加して、子どもたちと一緒におもちゃを作る」という結論に達しました。コメント欄で数回のやりとりの後、12月末に初めて長野さんに会い、参加の意向を伝えました。1月に入ってから、メンバーが集まって段ボールでコマや空気が砲などを作り、イベントで作るおもちゃの試作を繰り返ししました。そのなかで、ある工作の本に載っていた万華鏡が目にとまりました。(第四章参照)。作ってみると、案外簡単で、材料も文房具店ですぐ手に入るものばかり。「これでいこう」。作るおもちゃが決まり、あとは分担して材料を揃え、交通手段を確認してイベントの日を待つばかりとなりました。」

「段ボールマイスター班では、学生という身分、被災地から車で一時間半という物理的距離などの制約を抱えながらも「自分たちができること」を探し続けてきました。刻々と変化するボランティアニーズになかなか対応できず、時には「自分たちができることはないのかもしれない」という気持ちも浮かびました。それでも、被災地で求められていること、必要とされることをしようと模索を続けたところ、ひよんな出会いをきっかけに現地での活動の場にめぐり合うことができました。」

「人との出会いを大切にすることを。そして、「やりたいこと」を過度に押し通すのではなく、現地の状況に自分たちを対応させる柔軟さを持つことが、災害ボランティアには必要なのではないか」。段ボールマイスター班の活動を通じて、そんなことを感じました。」



被災地から離れていても、映画を通して応援団づくり。

「掘るまいか」やるまいか!

支援のために上映会をしているのに、
逆に山古志から元気をもらっていた。



樋山和恵さん

ひやまかずえ

新潟大学農学部3年。
大学1年の夏から市民団体「環境共育ネットワーク ワンダースクウェア」(以下WS)の活動に参加し、環境教育の場に関わっている。中越地震の後、WSのメンバーを中心とした有志とともに映画「掘るまいか」上映会の運営に携わった。

私は環境系の学部なので、1年生のとき、先輩に新潟市で環境のことをやっている団体を紹介されて、その「環境教育ネットワークワンダースクウェア」で、子どもたちとキャンプをしたり、棚田の保全活動などをしていました。そこで2004年6月に山古志村の隧道に行ってみて、「掘るまいか」という映画のことを知りました。新潟で上映会をしたいと話していたところ地震が起こって、実際に上

映会で募金を集めようという動きが始まりました。ワークショップでのつながり
隧道を見学したときに、山古志村役場の方に案内してもらい、顔見知りになっていたというのと、「まちづくり学校」という仲間で山古志のワークショップをしていた方のつながりがあった、役場のほうでもどうぞやってくださいという許可

をいただいたので、特に面倒なことなく上映会を開催することができました。

また、若い人にも観てもらいたいというのがあったので、新潟大学にもチラシを置いたり、3回の上映会を行いました。



夢のある山古志づくりプロジェクト

環境団体「ワンダースクエア」のメンバーを中心に上映実行委員会を立ち上げ、上映会を主催したり、ビデオを貸し出しをはじめた。この考えに県内各市町村をはじめ、社会福祉協議会、自治会、NPOなど多くの団体が賛同し、およそ県内50ヶ所で上映会がひらかれた。その際、メッセージや募金を集めたり、これからも山古志を支援していこうという「夢のある山古志づくりプロジェクト応援団」を募った。

現在では県内にとどまらず、全国各地で上映会がひらかれている。

映画『掘るまいか』

山古志村にある手掘りのトンネル「中山隧道」を舞台に描かれたドキュメント映画。文化庁文化記録映画優秀賞をはじめ、数々の賞を受賞。監督橋本信一。2003年制作。

現存する日本最長（約900m）の手掘り隧道の完成（戦前から昭和20年代）までを、村民へのインタビューなどで再現した映画に、**たくさんの人たちが感動を受けた。**

そこでできたネットワークは、さらに広がっている。

新潟大学でも、法学部、工学部、そして新大祭と今までに3回、上映会が行われている。

本当は支援のために上映会をしているのに、逆に映画を観た人が山古志から元気をもらおうというのがおもしろいと思いました。隧道に行ったときにも、その中を歩きながらぞくぞくするというか、怨念じゃないけど人の気がすごくこもつていて。明るい希望のある気のこもりかを感じました。

上映会を通して何回か観て、特に印象に残っているのは、今自分たちがやれば将来の子どものたちのためになるという思いで十六年間掘り続けたということ。手掘りで八百メートルも掘ったのは相当辛かったんだろうと思うんだけど、隧道に行ったときに会った、当時掘っていたというおじいちゃんから、楽しかった、今も元気をもらっているという話を聞くと安心しました。

映画を観るまでは「プロジェクトX」みたいなものだったんだらうと思うていて、でも実は村の人のあったかさとか自然の豊かさとか、いろんな元気でいっぱい、観た人はそれをもらって帰ってくればいいなと思います。

明るく料理を作る
おばあちゃんたち

「支援」だなんて
思っていない



地震のあと、山古志方面に入らせてもらって、実際に見て回ったんですけど、本当にもとの姿がわからなくて、外部の私が見て頭が真っ白になっちゃうくらいだから、住んでいた人はすごくショックだろうなと思うていた反面、仮設の集会所に行ったら、おばあちゃんたちがものすごく明るく料理を作っていて、戻るのを嬉しそうに話していたので、やっぱりそこでも私が元気をもらいう気がしました。

私は「支援」ってそんなに思っなくて。映画のエンディングで流れる山古志の風景が単純にすごくきれいで、それがなくなっちゃうのが悲しいという想いもあるし、山古志に行ったり人に会ったりすると力をもらえて、自分のまわりのことに跳ね返ってくるというか。これからは、新しい映画の制作が始まるという動きがあつて、今回せっかく応援団がそろったので、それでまた支援ができればと思っています。



段ボールのつながりが、子どもたちの笑顔を作った

星空ファクトリー

自分たちの意義が問われた災害



長野親情さん

ながのしんじょう

現団体のスタートであった、天文同好会を高校生の時に設立。以後大学・就職・転勤と団体の姿も変えつつ、現在はNPO 法人へ移行中。3児の父で一応身体障害13級。まだまだ、日本の子ども達の目の輝きも捨てたものではないぞ!とできる事を最大限に活用して、未来に投資をしている。「人間は、どこでもいつでもひとりぼっちじゃない! ビバ! 人間!!」。

長野 夏に私の目の前で水害があつたというのが、中越地震のときに「サイエンスキャラバン」事業を行った一番大きなきっかけです。水害が起きた時に三条・見附などの被災した小学校を対象に「科学の祭典」というのをやったのですが、震災の時も似たようなスタイルでもうちよつと体制を整えて行おうということになりました。なぜこんなことしようと思ったのかというのは、私が「星空ファクトリー」

という団体を作っている意義を問われている感じがしたので、何のためにこういった団体を作っているのかというのが、子どもたちは震災でどうしてもいろんな制限がかけられて、さらに大雪のときは外に出られないということもありましたので遊べる空間作りをしました。実は他にも親が子どもから目を離して一息つける時間を作りたいという意味もありました。

自分たちのしていることを、そのまま伝えたい。

長野 事業展開の中では「星空」という名前をつけているんですけど、基本的には子どもたちにもっと面白さとか不思議さに目を輝かせてもらいたいなという想いがありました。災害時は子どもたちも非常に不安そうなので、自分ができることで何かできないかなと思つたときに、自分たちがし

サイエンスキャラバン

被災地の子どもたちは、震災でどうしてもいろんな制限がかけられて、さらに大雪のときは外に出られないということもある。そのために遊べる空間作りを現地の小学校などで行っている。

また、親が子どもから目を離し、一息つける時間を作りたいという別のねらいもある。

星空ファクトリー

自然科学の普及活動をしており、活動の形式は、教室とか天体観測会など私たちが主催しているものと、PTA とか公民館など他の団体、自治会の依頼でもって動くという二通り。

構成メンバーは、一般社会人がほとんどだが、学校の先生や大学の教授もいる。

災害を体験した子どもたちは、非常に不安そうな目をしていて、自分ができなくて何かできないかなと思ったときに、自分たちがしていることをそのまま子どもたちに伝えていけばいいのかなというところに、必然的に到達してしまった。

していることをそのまま子どもたちに伝えていけばいいのかなというところに必然的に到達してしまっただけのことです。

日本のボランティアで つながる輪

長野 いろいろな活動をしている団体さんの有志でサイエンスキャラバンの実行委員会を立ち上げるにあたって、他にも同じような団体がないかとインターネットで探していました。ボランティアというのはいろんな形があるので、私たちがやるうとしていたボランティアに興味のある学生さんもいるだろうと思っていました。そのような時にブログを見て、「段ボールマイスター」ならコラボレーションできるということで声がけをしてみました。

新潟大学以外には長岡のエジソン学園や吉田の宇宙少年団などに声がけをしたのですが、いろんな団体とやっていく中で困ったことは、結局ボランティアなので皮算用がみごとに不足したことです。

栗原 人とのつながりということでは、サイエンスキャラバンのお手伝いで

「星空ファクトリー」のメンバーではなかったのですが、中越地震のときは事業の規模が大きいから行動範囲と人の輪が広がったなという気はします。

日本ではお寺があつて氏子がいって、お寺を建てるには檀家さんがお金を寄付して。お寺というのは自分たちの公共の場だから自分たちのお金を出し合つて、自分たちで掃除してというのもボランティアで、それが日本的なボランティアの根源というか。

長野 この事業を終えて言える事は、これだけ子どもたちが来て喜んでもらっているということとは少なくとも間違つたことはやってないんだな。今やっていることに確信がもてたというのは感じました。今は大人も子どもも不思議を不思議で終わら



せているので、もうちょっと不思議を素直に受け止めてくれるような体験をこれからも与えられたらいいなと思っています。

くりはらまさみ

東京オリンピックの年、新潟地震の1ヶ月前に生まれ（既に巨大地震経験者？）、中学1年から写真部に入り、中・高を通し写真と向き合い、今は仕事の一つ。小学校からの友人の誘いで旧新津市中央公民館主催の子供会「ガキ大」のボランティアスタッフとして参加。今年19年目を迎える会のスタッフとして現在も活動中。近年長野氏主催の星空ファクトリーへ星空ウォッチングのコマをお願いする事になり、以後現在のような付き合いとなる。



栗原正美さん

なにもできないけど、次の日も足が向いていた。

子どもの学びを支援する

批判や不安もあつたけど、子どもたちの顔を見ると、とにかくそばに行くしかなかった。



西田卓司さん

にしだたくじ

98年新潟大学農学部卒業、2000年大学院修士終了。現在、NPO法人「虹のおと」代表理事。巻町で地元のおばあちゃん達と一緒に畑仕事をして朝ごはんを食べる「人生最高の朝ごはん」などを実施中。

■結局何もできなかった

第一回は11月9日に8名で行きました。僕らは絵本読みをしたかったけれど、子どもと遊ぶ「のびのび隊」に加わって活動しました。現地のボランティア本部の方に「新潟大学の学生さんを連れて来れる」という話をしたら「今必要なのは一度にいっぱい来る人じゃなく、一人が何日も来て欲しいんだ」と。やっぱり自分が思っているのと現場で求められているニーズ

は全く違うものでした。週一回位行けばいいかと思っただけですけど、毎回違う人が来たら子どもは不安なわけです。打ち解けるまで一日位かかるのに、次の日また違う人がくる。子どもはむしろ疲れるんです。僕らの考えは本当に甘かったなと感じました。それで、二日以上連続で行ける人で募集して体制を立て直したんです。そこまでする必要があるのかとか、事故が起こったらどうするのかとか、

いう批判もありました。でも、目の前に子どもがいるのに今更毎日行けるわけではないとは言えないですよ。とにかく一回会っちゃうと行かざるをえない。ボランティアは余暇の範囲内でやるものだと考える方もいるかもしれないけど、僕にとっては人生の一部なんです。仕事じゃないし、ボランティアをしているからすごい人でも何でもなくて。僕に行くか行かないかという選択肢はなかったんで

虹のおとの活動

■虹のひろば

愛宕神社の境内、および愛宕の家で、昔の遊び、工作、料理体験などを行う。子どもが、大学生や大人と触れ合う中で、様々な学びを得るとともに、地域の大人が子育てにかかわる機会をつくる。

■まきどき村

角田山のふもと、福井地域の畑にて農作業体験を行いながら、かやぶきの家、「旧庄屋佐藤家」などを拠点に、地元の方との交流や伝統料理体験などを行う。「人生最高の朝ごはん」を毎週日曜日開催。

<http://www.makinet.jp/niji/>

メール info@makinet.jp

■震災での活動

川口町ボランティアセンター「こどものびのび隊」へ参加し、絵本の読み聞かせや子どもの遊び相手などを行う。また、川口町の受験生への学習支援ボランティアも行った。

「虹のおと」のメンバーと新潟大学の学生たちが、毎週毎週、雪深く覆われた川口町へ通い続け、被災地の中学生や高校生たちの学習を支援していた。

す。

その週末から五日間連続で行ったんですけど、僕たちには何もできないんだと感じるばかりでした。毎日行って帰ってくる。行く時は子どもたちに見えるからうきうきなんですけど、やっぱり話の節々に地震が本当に辛かったんだらうなというのが表れていて、帰り際はみんな黙っちゃう。僕らと一緒に遊んだところで、子どもたちの心のケアになっていない気がするんですよね。でも次の日も行かざるを得ないというか足が向いてしまうというか、そういう葛藤の繰り返しでした。精神的に楽になつてほしいなと祈ることしかできなかったです。

■新たなニーズに気づく

そんな中、ある時川口町に向かう車の中で、「受験生が狭い仮設住まいになって勉強に集中できない」というニュースをやっていたという話になりました。何とかできないかと考えて、新大のボランティア本部と一緒に家庭教師を派遣するという話になったんです。でもその時、子どもは教えてほしいよりも勉強できる環境がほしいことに気づいたんです。土・日に

場所を確保して、「わからないところがあれば教えます」という場が必要なのかなと思い、中学生の子どもをもつ親一人だけにニーズ調査したら「少なくともうちの娘は行くよ」と言われたので、その子のためだけでもいいと思って学習支援を始めました。12月の3週目から毎週土日に。休憩時間に卓球とかもしましたね。大学生と親しくなるって中学生にとつてはいいですよ。プロの家庭教師ではなく、大学生が話し相手というのが予想外の大きな効果があったと思います。

■ボランティアを通して

ボランティアという場を与えてくれたことに非常に感謝しています。僕の人生が変わりました。ボランティアでの出会いでこれからの人生の方向性が見え

たし、自習支援というコンセプトが自分の新しいキーワードとなりました。

■一歩踏み出したくても踏み出せない人へ
(ボランティアに関わらず)
世の中の半分以上そういう人だと思えます。行きたいけど行けない人は、友達と一緒に行けばいい。一人で悩まないで話してみたらいい。そして、やってみて、もし合わなかったら、すぐやめればいい。やり始めたただけで責任が生じるわけじゃない。始める自由、やめる自由、特に二十代の「探している時期」にはそういうのが許されると思います。もし始めたら責任もってやらなきゃというマジメな心が一歩踏み出すことを妨げている可能性もあるかもしれません。



寒さも厳しい早朝の新潟大学に、長蛇の列ができた。

おにぎり炊き出しぼら

ボランティアのコツは、 経験の有無と、縁の下の力持ち



石坂良成さん

いしざかよしなり

学生生活支援課学生係長。
「人を元気つける源は、美味しい食事。美味しい食事の秘訣は、作る人の真心!!」と語る。学生たちに親しみを持って接してくれる、頼れる石坂さん。…ただ、そのためか、とても忙しい。

中越地震による被害は甚大で、多くの家屋が倒壊し、中越地区の広い地域が停電・断水・ガスの供給停止、道路や橋も大きな地割れが発生し、電柱や信号機も傾き、高速道路も一般車両の交通が規制され、車では思うように被災地に行くことが出来ない状況でした。

この様な状況の中、多くの住民は、近くの体育館等の避難所やマイカーの中で、余震の恐怖に耐えながら、不自由な避難

所暮らしを強いられていることが、連日のマスコミの報道を通じて、私たち新潟大学の学生・教職員とも十分に知ることができました。

また、同じ年に発生した7・13水害の際、多くの学生・教職員が、真夏の猛暑の中、全身に汗しながら、水害の被災地でゴミの搬出・泥出し・清掃等のボランティア活動に従事した経験の有していたことから、地震発生直後から、被災地でのボ

ランティア活動を行いたいと考え、学生からもボランティア活動を行いたいとの希望も寄せられていました。

おにぎりの炊き出しを実施するに当たって、ご飯の炊き出し作業について、新潟大学生生活協同組合から協力をいただきましました。また、総菜が無くともおにぎりのみで美味しく食べられる、「五目おにぎり」を作ろうという提案もいただき、それを作ることになりました。

おにぎり炊き出しボランティア

地震後しばらくの間、強い余震が連日のように繰り返し発生してました。このことで、被災地での安全確保ができないことや被災地でのボランティア受け入れ態勢が十分に整っていないこと等を総合的に判断して、大学として、ボランティア活動を希望する学生の安全が十分に確保されたと確認できるまでは、被災地でのボランティア活動を見合わせる事となった。そんな状況の中、大学として、被災地でのボランティア活動以外で、『何かできることはないか』、また、被災地の避難住民が一番必要としている物は何か』と考えた結果、食事として支給されている菓子パン等では無く、手作りでお米のおにぎりを届けたいと考え、「おにぎり炊き出しボランティア」を行った。実施期間：2004年10月26日（火）～29日（金）

早朝7時
第一学生食堂前に
延べ4日間で約600人の学生・教職員が集まり
おにぎり約2,700個を作り
大学のトラック等で
長岡市役所
長岡工業高等専門学校
長岡技術科学大学などに運んだ。

「何かをしたい」という想いが集まった。

「おにぎり炊き出しボランティア」当日は、10月下旬の寒さも厳しさを増し始めた早朝7時、第一学生食堂集合にもかかわらず、旭町キャンパス（注：第一学生食堂のある五十嵐キャンパスは離れている）からの学生も含めて、集合時間前にはボランティア参加者の長蛇の列が玄関からあふれて、食堂前の広場まで続く程の多くの学生・教職員が集まり、被災地の皆さんの為に、「何かをしたい」という思いを強く感じることができました。

当初、10月26日（火）・27日（水）の2日間の実施を予定していましたが、たいへん多くの学生・教職員から参加をいただき、急遽、28日（木）・29日（金）も実施しました。実際の運営に当たっては、たいへん多くの皆さんから参加していただいた為、一部の参加者はせっかくな集合していただきながら、作業が無いなどの混乱も生じました。

しかし、2日目・3日目・4日目と少しずつ作業にも慣れ、学務部の女性職員が、学生達におにぎりの握り方のコツや作業の手順について指導したり、連日参加していた学生が、初めて参加する学生に作業の手順を教える等、学生と教職員が一体となつて、スムーズな運営ができるようになったのではないかと、思うとともに、災害発生時のボランティア対応は、全ての人が初めて経験することの積み重ねであるため、経験の有無が大きな要素になることを感じました。

また、朝7時から作業を始めるために、渡辺食堂部店長（当時）が、朝4時に出勤し、ご飯釜のスイッチを入れ、事前の準備・後片付けを行うなど、表にはでない様々な所で多くの人が、縁の下の力持ち的役割を果たすことにより、ボランティアが運営されていることも忘れてはならない大事なことであると痛感しました。

私たちが学生たちが、このように、多くの人との活動を通じて、交流を持つことにより、様々な経験（時に笑い、失敗して涙を流すのも良いでしょう。人は成功よりも、失敗から学ぶことの方が多しと思えます。）を積むことにより、人間として成長しながら、自分自身の「思い」を持ち、他人の「強い思い」を自分のこととして思うことができることは、とても素晴らしいことだと思えました。

最後になりましたが、「おにぎり炊き出しボランティア」に限らず、様々なボランティア活動に参加していただいた学生・教職員の皆さんに御礼を申し上げます。



大学の講義から生まれた、震災ボランティアのきっかけ。

何もしない自分はいやだ

もっと「相手の立場を考えればよかった」と、
今、思います。口だけじゃなくてね。



土屋 翼さん

つちやたすく

新潟大学法学部2年。
趣味はサッカーで、好きな選手はジュビロ磐田の中山雅史選手。
2004年度第2期に「新潟学ファシリテーター編」を受講。

新潟学という授業をとって、講師の先生が小千谷市ボランティアセンターの副本部長だったので、その人の話を聞いて興味を持ちました。そのときの自分を考えてみると、どこかで自分も申し訳ないじゃないけど、向こうはすごく困っているのに、大学生なんて一番暇じゃないですか。それが何もしないで生活していることが自分の中でいやだったんですね。

活動は小千谷に行っただけけれど、震災から一ヶ月程度しか経っていない勤労感謝の日に入りまして。部活が毎日あったので全然行けなかったんですけど、部活をサボって行ってきました。ボランティアを実質やったのはその日だけで、損壊した建物の片付けとか、一人暮らしの方の家の片付けに行きました。

ボランティアといってもただ行って何かすればいいというものでもないし、向こうの人の手伝いは伝いしかできないから。かわいそうだとか大変だとかは表面的なものだけど、実際に行くと本当の辛さが伝わってきました。自分は半分くらいしか役にたてないと思うんですよ。ただいろいろ考えさせられて、次はそういうことがあったときには前よりはできると思うんですけれど。もっと向こうの人の気持ちにわかるようになったとは思いません。

壊れたものの中からおぼあ

新潟学 ファシリテーター編
(新潟大学全学共通講義)

ファシリテーターとは、直訳すると、物事や人々の成長を促進する人、援助する人、進行を円滑にしたり、楽にする人です。近年、このファシリテーターが、新しいリーダーや指導者像として注目されています。この授業では、実際にファシリテーターとして、新潟県を中心にまちづくり等に関わっている方々を講師に迎えて、ワークショップ形式で、ファシリテーターや問題解決のためのプログラム作成の基礎を学びます。講義ではファシリテーターとしての基礎能力(コミュニケーション能力、情報収集力、グループでの学習方法、問題解決のためのプログラム作成の基礎など)を学習。講義開始後に発生した中越地震に関連したケーススタディとして、被災者との交流方法や、被災地の小学生のボランティア活動プログラムの作成方法等を学んだ。——シラバスより一部抜粋——

「先のことなんて分からない」そう言ったおばあちゃん。
実際に行くと本当の辛さが伝わってきました。
中途半端な気持ちで行くとだめなのかもしれないけど、
困っている人がいるから助けたいという気持ちだけでも
いいのかな。

ちゃんに「これは必要？」とか聞いたりしたんですけど、おばあちゃん一人じゃないですか。本当は聞かなくていいんですけど、一遍にこれは必要かとか言われたってわからないじゃないですか。おばあちゃんからしてみれば、こういう状況で家が壊れたりしているのに比べればそんなのは小さなことだと思うので、もつと相手の立場を考慮すればよかったなと思います。それが一番の後悔です。ボランティアに行つて困っている人をほっとけない気持ちが強くなりました。行つてよかったですけど、中途半端だった気がするのでもつとしつかりできればよかったなと思います。部活とかは言い訳みたいなもので、どっちが大事かって言ったら自分はサッカーのプロになるわけじゃないので、だったらボランティアをもつとちゃんときたんじゃないかなと思います。全国大会とかかぶっていたので周りの人は意気込んでたんですけど、自分はちよつと考え方が違って、でも心では思っていないです。口でいくらいいことを言っても行動に移さないと

じゃないですか。思っているだけならそれで終わるじゃないですか。だからもつとしつかりと行動に移せなかったのが後悔です。もつと部活を削つてもできなかなと思います。サッカーは自分のためだけ、ボランティアは違うじゃないですか。自分のためでもあるけど、人のために集まってこれだけのことやつてすごいと思います。今「今後もボランティアをやる」と言つて、昔はそう思ったからするんじゃないかと思うんですけど、もう思えたら行くと思うんです。中途半端な気持ちで行くと逆に邪魔になるので、しつかりとボランティアに行きたいと思えたら行きたいです。それがよく思われたいからとか人に言われて行くとかなら行かないほうがいいと思うので。しつかりし

た気持ちがあるなら行きたいです。口で言うだけにはなりたくないのだからそれだけにはならないように。中途半端な気持ちで行くとだめなのかもしれないけど、中途半端な気持ちでも行つて変わるならそれもいいのかなと思えるようになってきたというか。何もやらないよりはいいのかなと思います。でもそれが誰かに言われてとかだったらやらないほうがいいと思います。ボランティアじゃなくても、困っている人がいるから助けたいという気持ちだけでもいいのかなと。行つて変わると思うので。話がまとまっていなくても、去年から一年経つて自分の中でも振り返つて意見が変わつたなと思います。



災害研究の最前線から見たもの

「次に伝える」大切さ

調査団だけで情報をとどめておくのではなく、
たくさんの方々と共有すればよかった。



ト部厚志さん

うらべあつし

新潟大学の博士課程を修了後、通産省地質調査所（現産業技術総合研究所）、香川大学教員を経て新潟大学積雪地域災害研究センターに赴任。専門は地質学。埼玉県出身。2児のお父さん。先日、初めて5歳のお子さんとスキーに行くととても楽しんだが、同時に「面倒をみるあまり、大変疲れた」と話されていた。

うちは災害研究センターなのでとにかく全部調査に行きます。普段の研究は平野の地質を調べてその下に断層が埋まっているのかとかいったことをやっているんですが、専門とか関係なくなるべく全部記録したいという思いがあります。地元の大学がやらなければどこもやりませんので、とにかく歩いて記録して写真をとって後世に残し、その中で専門分野のことがあれば更にやりますけれど、地元だけ

ら全部記録を残すのだという気持ちで行きました。

昔、少しだけ通産省の地質調査所、今の産業技術研究所というところに居たときに、偶然にも阪神大震災が起きて、その調査にも行っていました。大学が終わって研究の道に立って、初めての出会いが大きな地震ということで、そういう経緯もあって地震があると思わなければという思いはいつもあるんです。

災害は、どんどん弱い人が取り残されていって、仮設住宅はあと一年しか居れないし、仮設住宅が終われば公営の復興住宅には移れるのですけれど、自分の住んでいたところへは戻れない。地質的調査ももちろん重要なんですけど、災害はやはり人なので。

更に改善が必要だと思ったのが我々とボランティアの人たちとの関係。当時の新大のボランティアの人たちと去年（平

新潟大学積雪地域災害研究センター

昭和44年、理学部付属地震研究施設としてスタート。続いて出来た工学部付属雪氷工学研究施設と統合し、学内共同の研究施設として昭和53年に積雪地域災害研究センターに。

新潟大学五十嵐キャンパス構内にあり、積雪地域における自然災害に関する研究と、その対策技術の研究を目的としている。

今回、専門分野的観点から分かったことは、震源地の真上が一番被害が大きいのではなく、そこから少し離れたところに直線的に被害が出ているといったことだったんですが、調査をしていてもっと人に目を向けて復興への記録をしていきたいと思い始めました。

成十六年）集まりがあつて「どこが被害が大きいのか分からなかったし、入れるルートも分からなかったし、長岡に一斉に集まって逆にボランティアが余る状況だった」みたいなことを言っていました。

我々は毎日調査に行っていた訳で、被災地の奥深いところへのルートだって持ってたし、新大の対策会議はここでやってた訳だし、職員は全員調査とか行ってますから被災地の情報も毎日ある訳で、新潟大学の間違いなくここが一番情報がいっぱいあったと思います。そういうものを調査団の中だけに留めずボランティアの人たちや、更には医療や文化財保護の人たちにも渡すべきだったと反省しています。

あと気がついたのは、被災地の方々は「あれしてこれして」という人があまりいない。だから、ボランティアの人は求められるのを待っているのではなく積極的に自分たちで被災者の方のニーズを探ることが必要なんじゃないかと思いました。

ただ、ボランティアの人たちも今回長岡に集中しているみたいな感じで、来ている地域と来

ていない地域とがあつたので、やっぱりやりたいと思ってる人とやってほしいと思う人を繋ぐようなボランティアの人が必要だと思いました。やりたいというニーズとやって欲しいというニーズを探して、つなげるような。

中越で活動している自衛隊に取材に行って「東海地震とか東南海地震が起きたらどうですか」と聞いたら「今の体制では無理だろうな。中越地震は、人口が少ないのであれだけの震度でも絶対的な被害が少ないから対応できたけど、これ以上になつたら限界を感じる」と言っていました。よくよく自分たち

で何とかするのだという自主防災の意識を持つてもらわないと東海地震等の被害は甚大になると思います。それに関連して今、

我々中越地震を経験したものが出来ることは「伝える」ということにつきると思います。私もあなた方もその為に記録を残している訳ですから。中越ではこうしたよと言うのをあらかじめわかっけてもらって大学の取り組み、自主防災組織やボランティアとの情報交換、ニーズ探しなんかを生かしてもらおうことですよね。

最後に、やはり今の我々が出ることは、今回の経験をちゃんと記録して、今度やろうとして集まった人が読めば分かるようにノウハウを残しておかなければいけないと言うことにつきると思います。私もよりよく組織が動くように今の記録をちゃんととっておかないと思っています。



農という、地域に根ざした学びをつむぐ。

地域とのつながり

「他人ごと」「じゃなく、
自分ごと」として考えていくことが大切。



あらやあきひこ

荒谷明日兒さん

新潟大学農学部教授。
林業経済学が専門分野。
農業生産科学科食料・資源経
済学コースを担当する。
「教育や研究も常にフィール
ドに根ざした、地域に根ざし
たつながりがあることが大
切」と先生は語る。

学生の多くは、ボランティア
に行くとき、大概はボランティ
アは「一方通行」だと思ってい
る。手助けをしてあげるんだ
と。強い人が弱い人を助けてあ
げる、そういう気持ちで行くよ
うだ。
ところが行ってみるとそうで
はなくなつて帰ってくる。自分
でなにか得てくる。得るものは、
人によっていろんなものがある
し、考え方も違うものがあるん
だけど、何かしら得てくる。

ボランティアっていうのは相
互関係。コミュニケーションな
んだと思う。作業して「大変だ
なあ」とか思いながらも、「あ
りがとう、助けてもらつてあり
がたかった」とか言われると、
気持ちが変わる。普段であれば
見返りがあつて仕事をするもの
が、見返りがなくても、ただ言
葉で「ありがとう」と言われる
だけでも、人のために働き、無
償で汗を流したことの気持ち良
さつていうか、そういうことに

気がついて帰ってくる。そんな
ことだけではないとは思うが、
ギブだけのつもりがテイクをし
てきた、何かを得て帰つてきた
ようだ。
ボランティアについては、
改善点もまだまだある。
改善点は、学生にボランティ
アをどうアピールしていったら
いいかということ。満足に学生
たちが集まったのは、土日くら
い。あとは、参加してもらうの

新潟大学農学部
被災農地支援学生ボランティア

2004年10月末に起きた新潟県中越地震により被害を受けた農村の水田・畦畔を復旧させる目的で行われた。新潟大学震災ボランティア本部と新潟大学農学部は連携してこのボランティアを行った。具体的には新潟大学震災ボランティア本部は現地の役場と連絡を取り、農家のボランティアニーズの把握をして、全学部にポスターを貼るなどして学生への情報発信を行った。新潟大学農学部は受け付けたボランティアに対して農学部専用バスを出し、学生・教職員の移動派遣手段を確保した。

ボランティア派遣先は川口町(6回)、旧小国町(10回)、小千谷市(1回)となった。

※新潟大学農学部は、長岡市合併前の小国町と交流協定を結んでいる。

水路の修理や土砂の引き上げ、田植え作業、瓦礫の撤去や、倒壊家屋からの家具の搬出作業に、5月20日から6月11日の14日間で、学生・教職員合わせて述べ207人が汗を流した。

に苦勞した。災害など社会の出来事に対する関心をどうやって彼らに植え付けていくのか。今の学生を見てると、自分たちの生活と関係ないことは知らないという傾向がある。学生に「新聞読んでるか?」と聞いても、きちんとして読んでるのは、わずかな。」「テレビ見てるか?」と聞いても、ニュースなんか見てないというのも大勢いる。自分の方から社会からアイソレイトしてやるような。そういう状況がある。

そうは言いながらも、大学院の学生も来てくれたが、農学部の学生600人のうち、200人近くが動いてくれた。かなりいい成績だったんじゃないかという気はする。事後のアンケートをみると、かなりの部分がかしら得て帰ってきた。損したなんて思っている学生はほとんどいないと思う。最初は、遠足みたいな気持ちで行った学生も、たぶん中にはいると思う。そんな学生でも、行って現場で何か考える。

今は農学部として、ボランティア活動はやってないけど、雪が解けて農地が痛んでいる場所がわかれば、また要請がくれ

ば動くつもりでいる。

柔軟に対応していくこと

学生の中から不満もあった。

向こうのボランティアセンターとの関係になるんだが、行って待たされる。仕事を割りあてをされるまでに。よそからもボランティアはいっているわけだし。またきちつと作業内容とか前もって調べてから送り出さなきゃいけないといった学生の意見もある。

しかし、前もって作業の概要などは言ってくるけど、実際はどういう作業かかわしいことはわからない。向こういかに。しかし作業のための準備、長靴だとかそういうものをきちつと指示をしてくれど。

そんなものは、遊びにいくんじゃないんだから、汚くたって

いいような格好で行くっていうのが当然なんではないか。農地へのボランティアなのだから、長靴は当然だ。

自然を目の前にして

学生にとつて、「どれだけ自然の力っていうのがすごい」とか、「自然を前に、人間の存在なんてどんなに小さなものか」を、目の当たりに見て、これからの人生に大変有意義だったと思う。

テレビで見ているだけなら、「ああ、大変ですね」で終わる。だから、学生には、ぜひ行って、経験してもらいたい。それにそこでいくらか手伝うことによつて、いろんなことを考えてほしい。



何かできなくても、 会うだけでもいいんだ。

川口町の学習支援に通い続けるうちに、子どもたちに顔を覚えてもらい、すごく親しげに声をかけてもらったことがあります。

また、子どもの保護者の方に昼食をご馳走になる事もありました。

今考えると、あの時は「ボランティアに行く」という考えよりは「会いに行く」という想いの方が強かった楊に感じます。「やらなきゃ」と感じる事も大切だけど、それよりも「やりたい」と感じる事がもっと大切だと思いました。

また、活動を通して、通い続ける事の重要性も改めて認識しました。通い続ける事により、相手に顔を覚えてもらい、お互いの信頼関係が生まれて、ボランティア活動も、より良いものになると思えました。通い続けるのは大変かもしれないけど、現地にいつても何も活動ができなくても、ただ現地の人と「会う」だけで立派なボランティアだと思えます。

「ただ、「何かしたい」という想いを相手に伝えるだけでも十分だと思えます」

地震がきつかけで、中越に何度も足を運んだけど、「ボランティアに行く」と意識せず、「交流」を続ける事が本当の復興につながると感じました。今後も中越には行きたいです。

はっとり しょうへい
新潟大学を卒業後、名古屋大学大学院へ進学し、数学を専攻する傍ら、被災地での活動を報告するなどをして「防災」に重点をおいた活動を展開している。

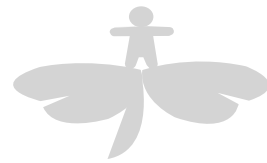


服部祥平

2004年度 理学部卒業生

第四章

手作りの道具たち



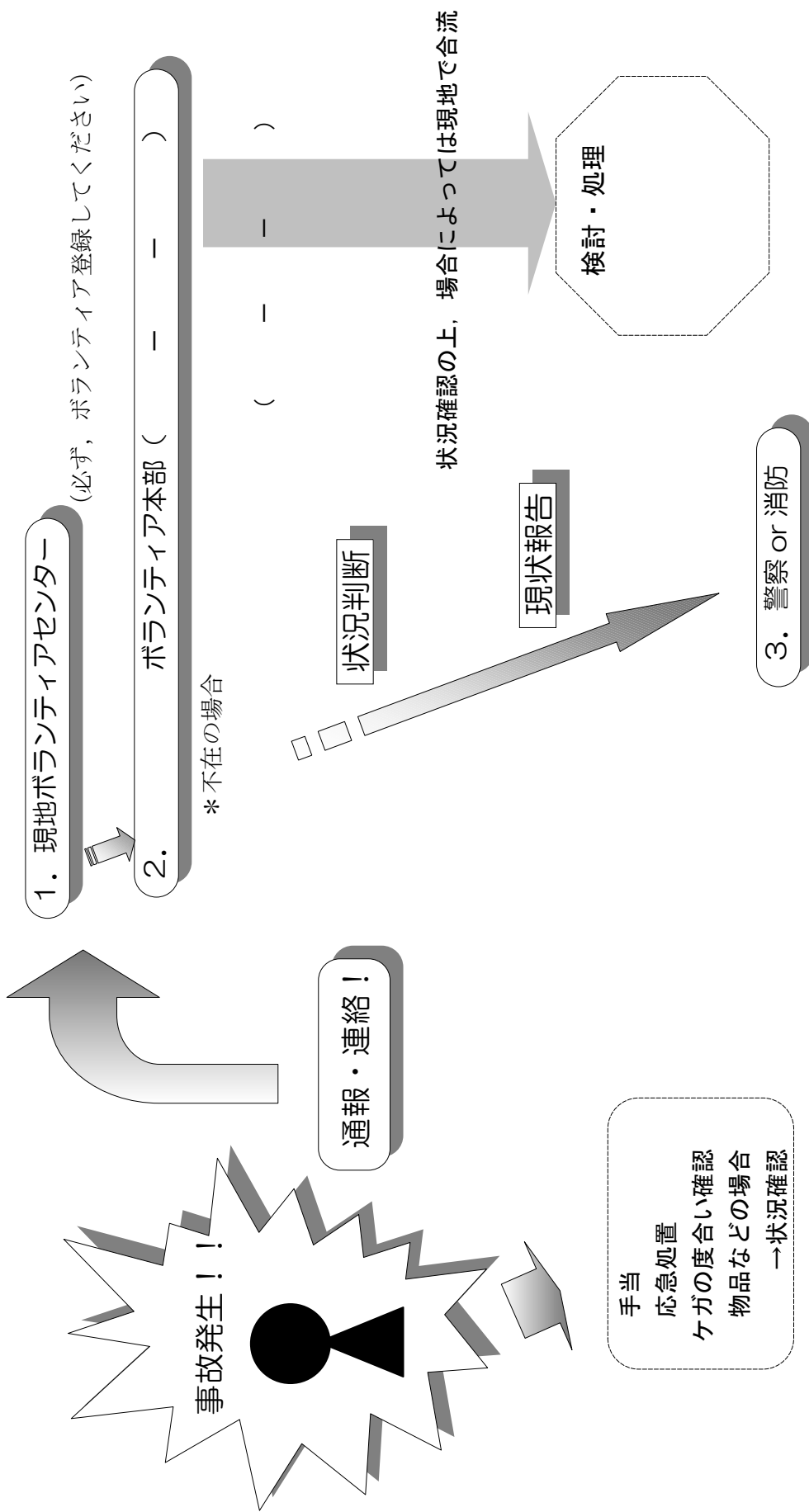
- 危機管理マニュアル
- ボランティア活動報告シート
- ニーズ受付カード
- ボランティア受付カード
- 手作り万華鏡
- ちゃぶ台
- 巨大サイコロ（ごきげんよう）
- クリスマス・ツリー
- 収納ボックス
- 扉つきボックス

コラム：「カタチ」のある、ボランティア

危機管理マニュアル

☆ボランティアに行く際、必ずこのマニュアルを携帯してください

もしも、事故にあったり、事故を起こしてしまったら、



あくまでも、被害にあわれた方を第一に考えてください！ 慌てず、どんな些細なことでも、報告しましょう！

震災ボランティア本部

ボランティア活動報告シート

ボランティアをして、感じたこと・考えたことをご記入ください。今後の活動の参考にさせていただきます。

学部：	学年：	学籍番号：	氏名：
活動日：	月	日	活動場所：
① 活動内容 どんなボランティアをしましたか？			
② 感想 今日気付いたこと・嬉しかったこと・満足したこと・不満に思ったこと・悲しかったこと・言い残したこと etc,...			
③ ボランティア本部への要望 気付いたこと・要望 etc ご自由にどうぞ			

ご協力ありがとうございました。記入後、
復興にご協力お願いいたします。

ボランティア本部までお持ちください。今後とも、
FAX: - -

ニーズ受付カード	受付者	平成 年 月 日	NO,
----------	-----	----------	-----

ボランティアが必要な人	依頼者（担当）
ボランティアが必要な場所	現地
住所	住所（わかる範囲で）
電話	
緊急連絡先	

内容

■希望日 ____月__日～____月__日 午前・午後・一日中 至急・指定・長期

■必要人数 男性__人 女性__人 どちらでも__人 計__人

○一般住宅など 掃除 方付け ゴミだし 荷物等搬入 軽作業
 メンタルケア（ ）
 その他（ ）

○避難所など 掃除 方付け ゴミだし 炊き出し 荷物等搬入 軽作業
 メンタルケア（ ）
 その他（ ）

○ボランティア
 センターなど 事務・運営サポート 荷物等搬入 運搬 聞き取り調査など
 その他（ ）

○その他（ ）
 業務内容：

備考

必要資材・装備・配車の有無	
作業状態	継続・作業完了・その他（ ）

対応ボランティア名	代表者連絡先

ボランティア活動中の緊急連絡先：

ボランティア本部 — —

ボランティア受付カード

記入日 月 日 ()

以下を記入してください。個人情報は責任を持って管理します。

ボランティア場所	
企 画 (プロジェクト)	
日 付	
学部・学年・学籍番号	
氏 名	フリガナ ----- _____ _____ _____
住 所	〒 ー
電話番号	() ー ー
Mail アドレス	
生年月日	1 9 年 月 日
備 考	

----- 以下は記入しないでください -----

- ・受付担当者 []
- ・受付日時 [] 月 [] 日 [] 時 [] 分

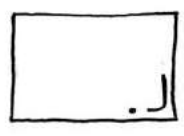
- ・データベース入力 未 / 済 ←○をつける

- データベース入力者 []
- データベース入力日 [] 月 [] 日 [] 時 [] 分

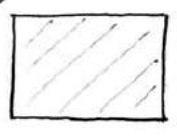
★ 手作り 万華鏡 ★ を作ってみようよ

材料・道具

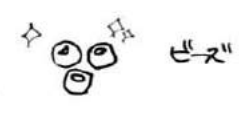
かたの
アクリルやガラスでも
OK



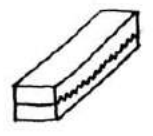
透明な
プラスチックの板



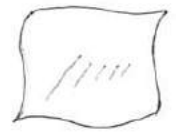
画用紙 { 黒1枚
白1枚
好きな色1枚



ビーズ



サンダーペーパー



半透明のビニール

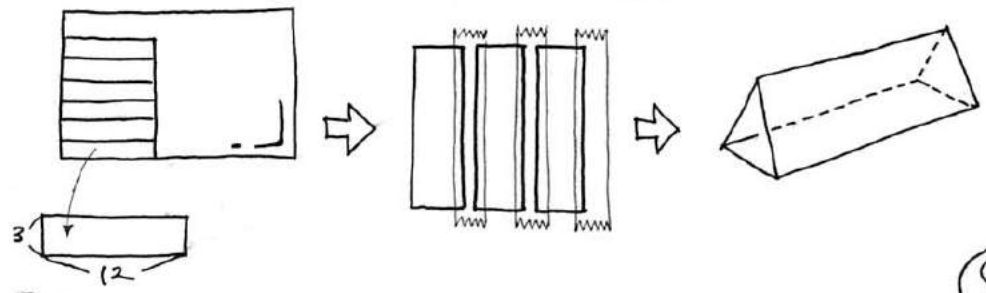
スターの
買い物袋も
OK

- はさみ (もしくはカッター)
- ものしし
- セロシテープ
- 両面テープ

作り方

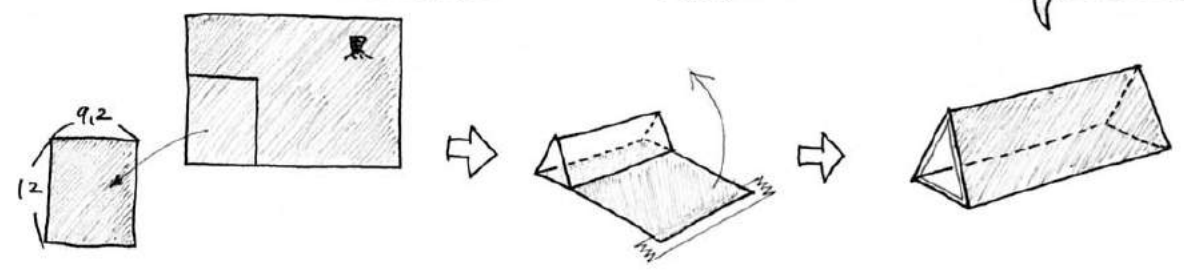
〈単位:cm〉

① プラスチックの板を切って、3枚をセロシテープで貼る。

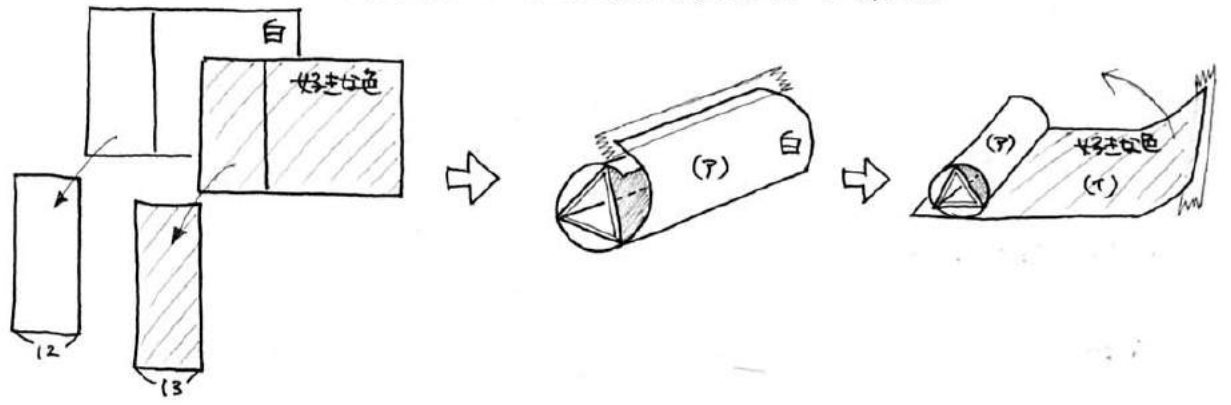


② 黒の画用紙を切って、①に巻きつけ、セロシテープで貼る。

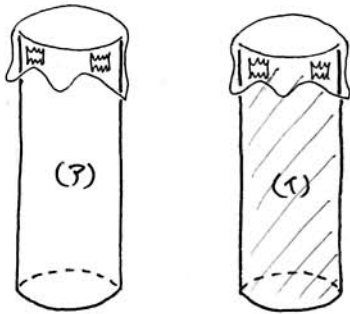
①にきれいに巻きつけると、
ごまがりもきれいになるよ



③ (ア) 白の画用紙を切って、②に丸く筒状に巻きつけ、セロシテープで貼る。
(イ) さらに、好きな色の画用紙を切って、(ア)に巻きつけ、セロシテープで貼る。



④ 筒(A)にはサランラップ®を 筒(B)には半透明のビニールを両面テープ®で見える。

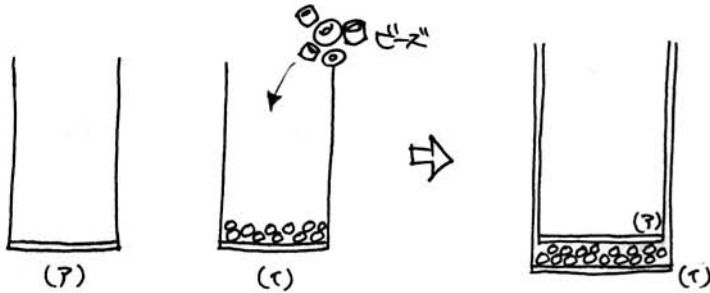


Point

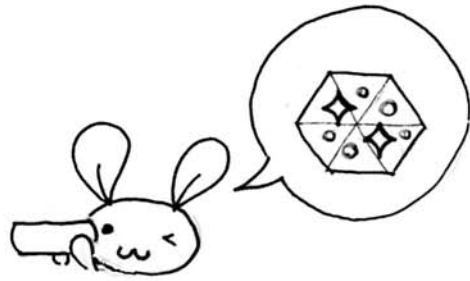
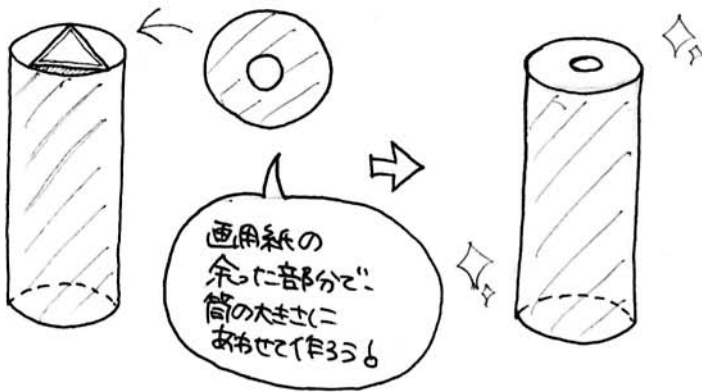
- ②, 筒(A), 筒(B)をそれぞれ木と木はすして作業をして、最後に戻すと、やりやすいよ
- 筒にラップやビニールを見つけたら先にセロハンテープ®で巻くようにして見るときれいになるよ



⑤ 筒(B)にビーズを流し込み、その口から筒(A)を差し込む。



⑥ 最後にのどきたとして、丸く切った画用紙を見取りつける。

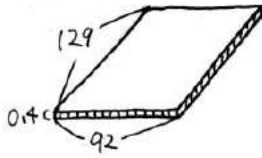


明るくおもしろい
のどきてみるよ

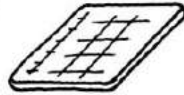
ダンボール ちゃぶ台

材料・道具

<単位:cm>



段ボールのボード



カットインのボード



カッター



木のさし



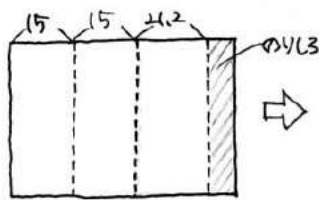
ボンド



えんぴつ
RIRペン

作り方

1. 足を作ろう!!



---で折る.



のりしろを内側にして
見合わせる.



8つでまわら...

足(4本)完成!!

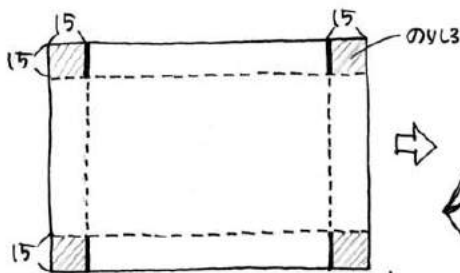


二本と同じものを
8つ作ります.

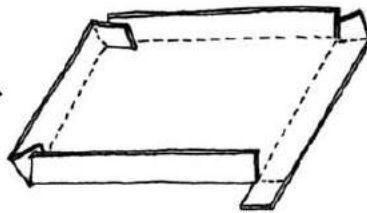
2つずつ組み合わせて見合わせる.
正方形のパーツを4つ作ります.

2. 台を作ろう!!

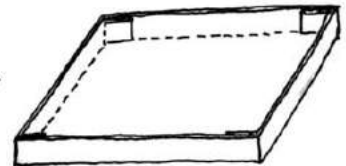
段ボールのボードを1枚全部使って作ります.



のりしろを内側にして
見合わせる.



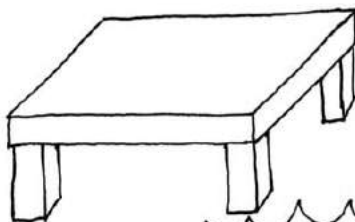
---折る
—切る



台完成!!

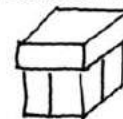
3. 組み立てよう!!

(1,2)で作った足と台を組み合わせて...



ちゃぶ台完成!!

☆ 足を4本のために、台を小さめに
1作って組み合わせると...



(1)も出来ます.

ダンボール家具

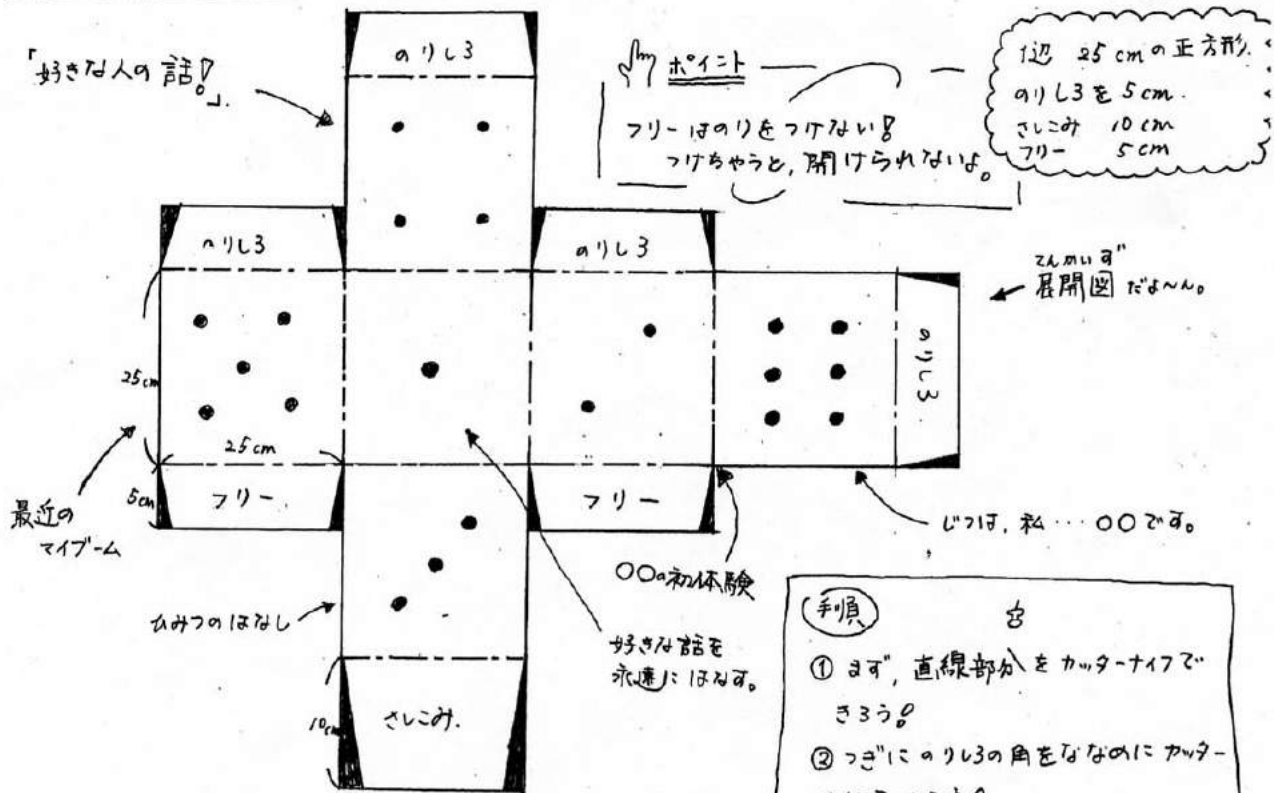


材料・道具



あとは、
元気がいいほうがいいね
カッターナイフを
正しくかえり
お友達。

作り方



『...かたのつけたか(ギョウジャギョウ)』

- カッターナイフの刃じやない方をつか、てかたをつけたべし
- ボールペンの何度もなぞるべし。
- 「エイ」「ヤー」で整理やり折っちゃうべし。

- 手順
- ① まず、直線部分をカッターナイフできこう。
 - ② つぎにのりしろの角をななめにカッターナイフできこう。
 - ③ ほんで、そのつぎは、---の所をかりやすくかた、をつきましょう。
 - ④ のりしろにボンドをうすくのはし、組み立てたからほりつけていこう。
 - ⑤ 組み立てたのりかかわりまで、ちかうあそびであそびましょう。
 - ⑥ 分後ボンドが透明になったら各面に1とかまとか書いて、お話のテーマを書いてみよう。
 - ⑦ あとほ、お楽しみだよ。

*わいた人: りゅうた。

*つきた人: りか、ゆうすけ、24POM、りゅうた。

✕mas PROJECT (I作)

おすき

☆ ツリーを作る。

- ダンボールでツリーをつくる。(4種の中から選び、制作)
- 葉で着彩

☆ ツリーを飾る。
※ 飾る大きなツリーを
あらかじめ作っておく。

- モニュメントをつくる。(ダンボール、おリ紙 etc...)

← かける部品をたくさん作っておく。

< ダンボールのモニュメント例 >



① 絵をかく。(クレヨン)



② 切り取る。



③ カギをかんづめ
裏側に貼る。

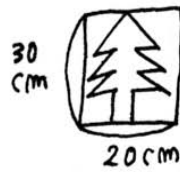


④ 出来上がり。



★ツリーの作り方

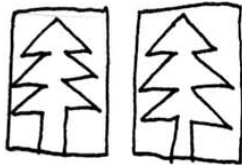
すずき



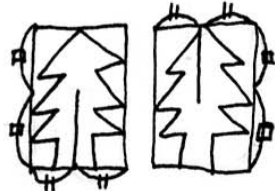
(基本サイズ)



① 2枚バージョン



ツリーをかく。



2等分のトコまで
セリ込みを入れる。



ツリーの形にきる。



くみあわせて
出来上がり。

② 4枚バージョン



ツリーをかく。



四等分し、それぞれ
セリ込みを入れる。

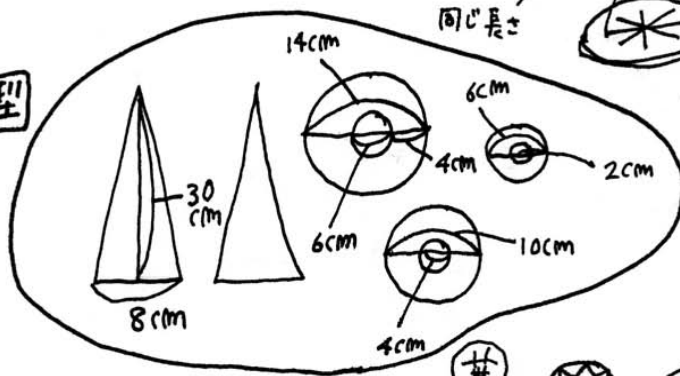


ツリーの形に切る。

この川原に
きりこんで
完成。

③

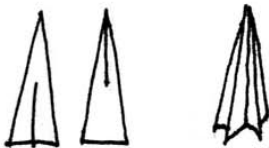
型紙



同じ長さ

こういうのを作って、
木の足にはめると、きれいになる!

木

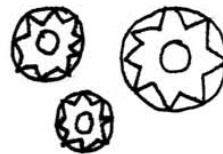


セリ込みを
入れる。



くみあわせて
木の形部分

花



ギザギザをかく。

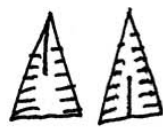
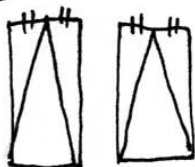


きりきる。



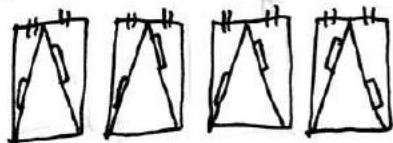
くみあわせて
出来上がり。

④



バラバラに
曲げて
出来上がり。

5

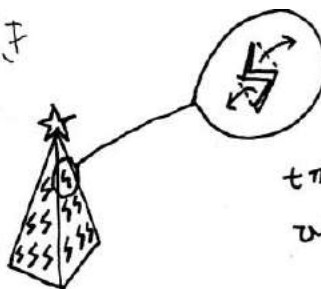


四つの同じ三角形をつくる。
のりしろ部分はのこす。



セリ込みを入れる。
(4枚とも)

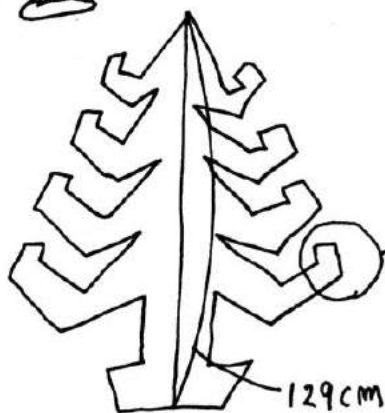
すあし



セリ込み部分を
ひいて完成。

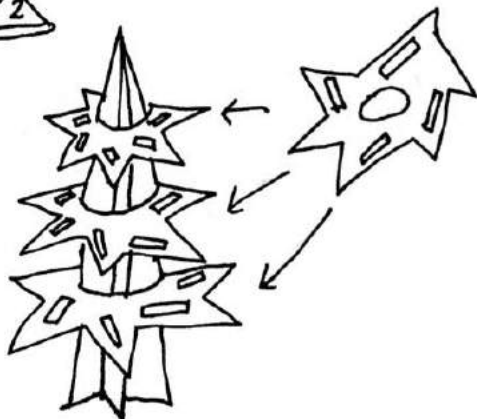
四枚くみ合わせる。
(のりしろをポイントでとめる。)

★ モニュメントが飾れるツリーの工夫



大きさは出来るだけ大きく。

食牢れるように曲げる。



ギザギザ部分に穴をあける。

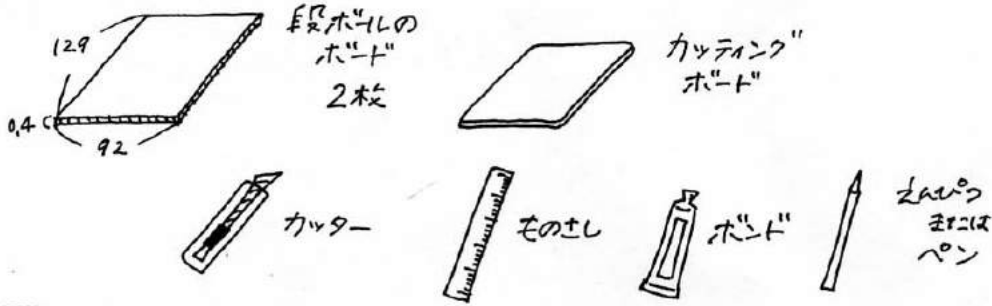
ダンボール家具

収納ボックス

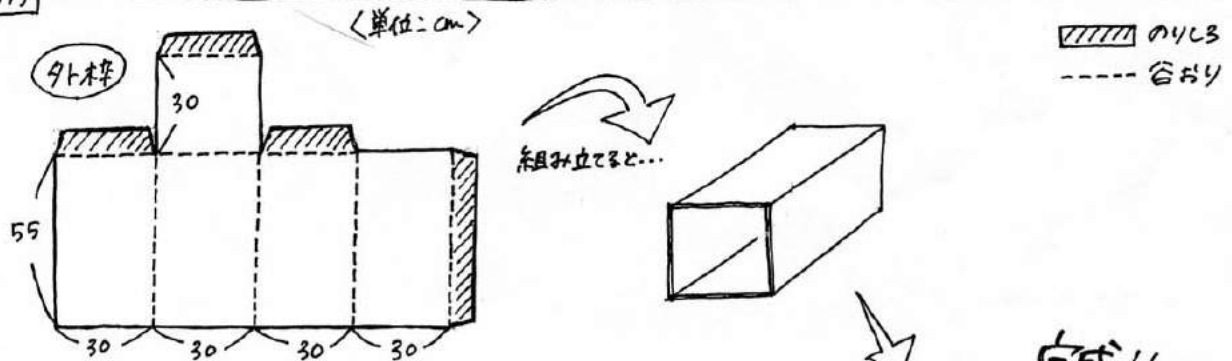
作った人：
しほへい、たけみ
りゆう子、ゆりすけ
あきこ、りか

所要時間：45分

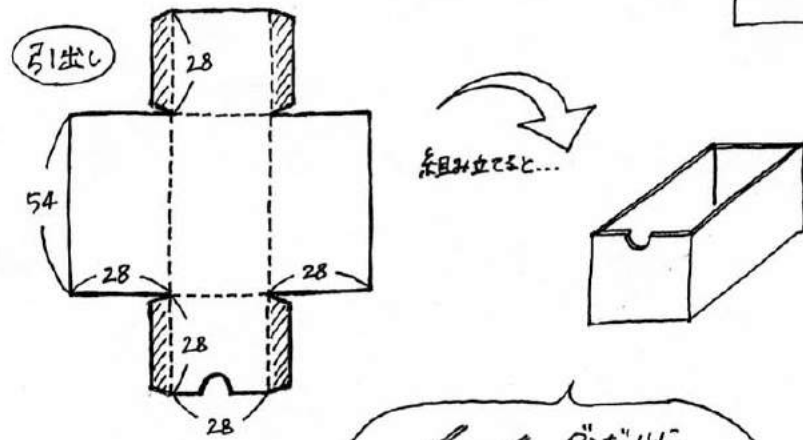
木材料・道具



作り方



のりしろの部分は
角を落とす



ダンボールに
穴をあけ
ひもなどで
ついてもよい。

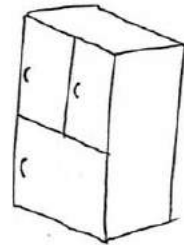
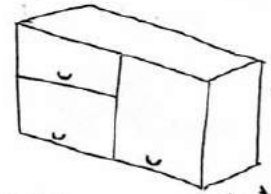
サイズをかえてもできます。
その際、
外枠と引き出しの各辺の差を
2cmくらいにするこ
うできます。

言設計図・りか

by 大滝

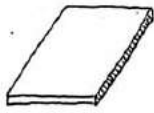
ダンボール家具

とびらつきボックス



たておき
はたき
のり
でも
使えます!!

材料・道具



段ボールの
ボード 2枚
(たて 128センチ
よこ 92センチ
厚さ 4ミリ)



「Cuttingボード」
・カッターを使うときに
下置きになれど何でもよい
・40×30cmくらいあると
作業しやすい



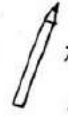
カッター



ものさし
50cmあざと
便利



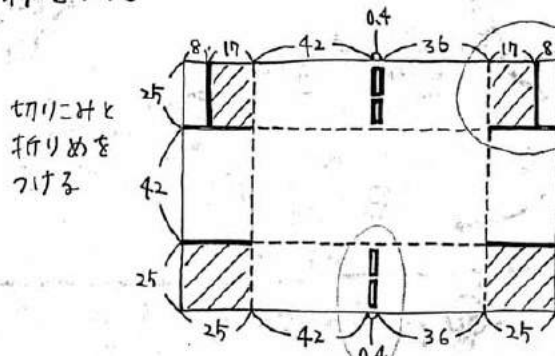
ボンド



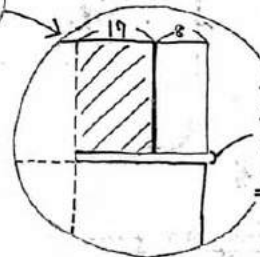
えんぴつ
または
ペン

作り方

① 外枠をつくる



切り目と
折りめを
つける

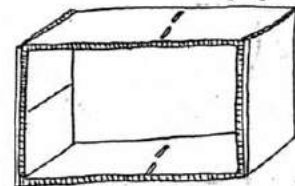
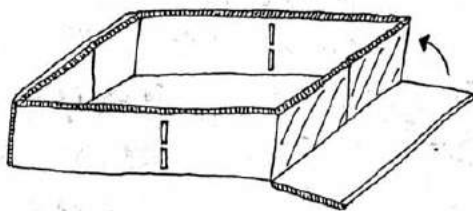


単位はセンチメートル
— は切る
- - - は谷あり
... は山あり
// はのりしろです

段ボールの厚みで
組み立てるとズレが
でるので、のりしろの幅分を
5ミリ切り取る
(角の4カ所だけ)

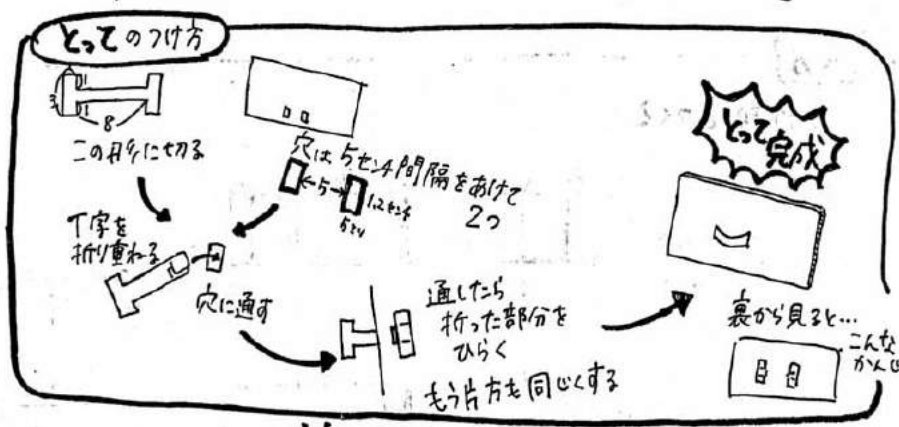
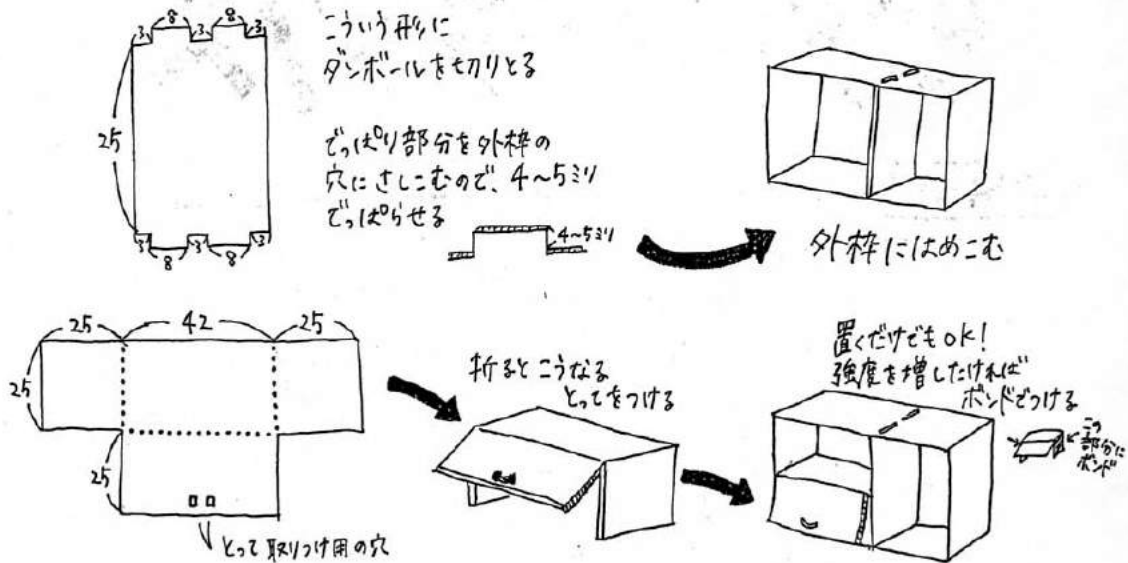
任意の切り目をはめこむための
穴をあける。(8センチ×4ミリ)
大きくしてしまうとグラグラして
しまうので、ピッタリするように慎重に!!
(上下2穴ずつ)

内側に折りこんで
のりしろをボンドで貼りつける

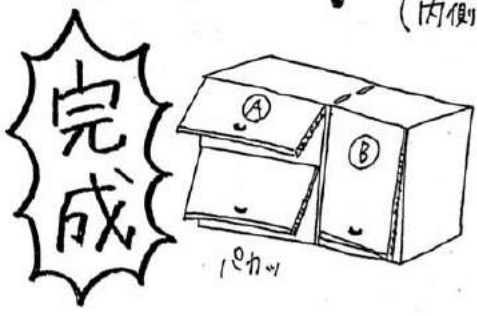
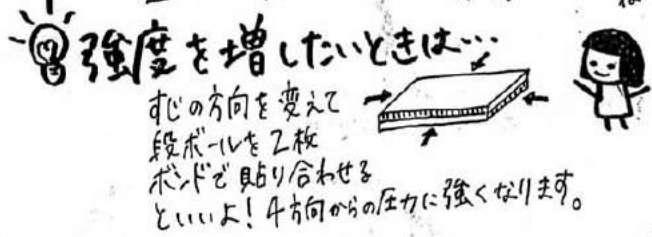
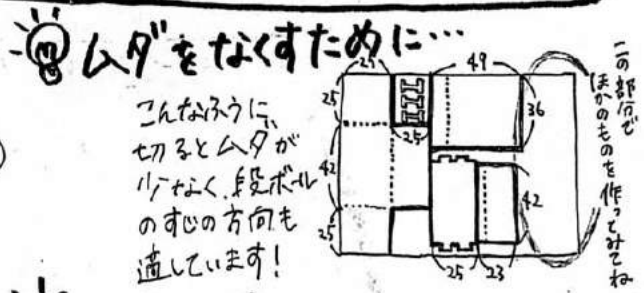
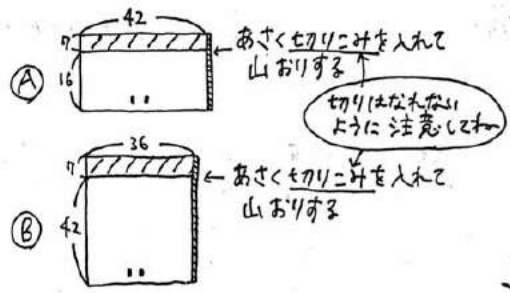


外枠完成

② 仕切りをつくる



③ とびらををつくる



仕切りやとびらの数・大きさは用途に合わせて作る事ができます。使いやすいように作ってあげてください!

「カタチ」のある、ボランティア

想いを集める、届ける。

震災発生から、本部では現地へ送る物資を集めました。

新潟県を始めとした行政へも全国から沢山の物資が集まり、その多くは現地へ届けられました。しかし、今もまだ現地へ届いていない物資があります。

―物資に込められた想いを届けることはできないだろうか―

そう考えた私たちは、物資を販売し、売上金を義援金にかえて送る方法としてチャリティバザーを実施しました。バザー自体は小規模でしたが、多くの想いを届けることができました。

また、バザー以外にも2005年12月22日に起きた新潟大停電では、保管していたタオルを吹雪の中歩いてきた学生に無料配布しました。色々な方法で物資を活かせると思った貴重な体験でした。

物資を利用したバザーは様々な団体で行っていますが、まだまだ物資は残っています。スマトラ沖地震の被災地へ送る計画もあります。今後、全国から集まった想いをどう伝えていくかは重要な課題です。

―現地へ行くことは出来ないけれど、何かしたい―

そんな想いを集めて、現地へ届ける。これも立派なコーディネートではないでしょうか。

なかい みさ
チャリティバザー・「震災という名の写真展」のプロジェクトマネージャーを担当。



中井美紗
新潟大学法学部2年

第五章

つぎの扉へ



- 震災ボランティア本部座談会
- 活動のふりかえり
- あるスタッフの本音
- あともがき

コラム：「中間支援」の現場から



新潟大学震災ボランティア本部が立ち上がって1年半の月日が流れました。
新しいメンバーも交え、今までの活動を振り返る意味で、座談会を開きました。
「自分たちらしく」、「つぎの扉」を開けようと、皆真剣に模索しているようでした。

震災ボランティア本部座談会

できたことって、なんだろう。
もしかしたら、
何もできていなかったのかもしれない。
だけど大切なこと、
ちよつとだけわかったような気がする。

コーディネーター、コーディネーターってこういうことか、こういうことか、こういうことか、義付け的なことは、今の僕は出来ない。
ただ、震災に関するボランティアであるとか、ボランティア以外の普通行動、人間の活動は、ある「一定の流れ」ってあると思うんですね。その流れをもっとよくするってことが僕にとつてのコーディネーターって感じかな。ボランティア本部についてそう思いました。

最初からコーディネーターしようと思っただけにいた訳ではなかったんです。
この本部に入るときは「センター的な役割」って言われて、多分受付などのものかなと感じてた。結局はそれもコーディネーターだったと思います。それ以外のプロジェクトを立ち上げることも、何をしていいかわからない人たちにとつて、中越地震のボランティアで「何かしよう」というきっかけになつて、最初に誰かが言ってくれた「背中を押す」ということのひとつかなあと思いました。コーディネ



ネットはいろんな方法があつて、それが一つ一つ増えてきたのかなって思っています。

自分が雑用でも役に立てるようなことがあるんだつたらやろうかな。

コーディネートターってのは、実際にその現場にいったらどうするっていうのよりは、むしろボランティアのための雑用一手に引き受けているようなそんなイメージが自分の中にはありました。

ボランティアしたいっていう気持ちやなんとかつなげたいなって思ってた活動していた。

水害の時、大学が出していたバスに乗れなかったの、なんか私がそういうできなかつたっていうのがあつて、たぶん、そういう人もいるんだろうなって思ってたので、震災のときは何かできたらって思っていた矢先にこの存在を知ったので。まあ、いやなんともコーディネートターって話になつていないんですが、そういう感じでとてもよかつたなあと思います。

理想は、完全にとは言わなくても、あとはトロッコが乗れば走り出せるぐらいまでレールをつくれれば。

行きたい人がそれこそ行きますつて行った瞬間にレールに乗ってシャーツと現地いつて、働いてまたレールでシャーツと帰つてこれれば一番いいのになつていう感じで。でも、そこまではさすがに作れない。だけどもせめてそのトロッコに乗る駅くらいはつくられたらいいなと思います。

自分の理由でボランティアに行ったりしていません。

それでいいんじゃないって自分では思っていたし、そのボランティアで偶然一緒になつた人も、「うん。俺もそんなもんだよ」って言われて。

「困っている人がいるんだから、助けに行く自分は正義の人なんだ」とか、そんなことよりはずつと健全なかもしれないなとは思つたりはしました。

NPOの人たちは、ボランティアを自分が楽しむためにやってみたいいなことを言っています。

でも自分にはまだそうやってみることはできなくて、なんかまだ、そういうのはできないのかなつて感じはします。

私は実家のあたりが震災を受けたので、実家の方に戻るわけにはいかなかつたんです。

交通手段も、一時期高速バスは動いていたんですけど、すぐ止まりました。それに、家に帰つたところで、被災者がもう一人増えるだけなので、邪魔だから帰ってくるなつていう感じでした。でもすごく、自分たちというか身近とかほんとなら親者のことだから、何もしないでいるのも何だかなくてのがあります。

私も震度5あつた地区に住んでいます。

地震のために、丁度東京からこちらに向かつていた両親が帰つてこれなくなつて、連絡もつかないという状況がショックでした。

現地に行くのは、両親や祖父母にすぎく止められていました。

それでもなにかやりたくて。募金するだけじゃ、結局何に使われるか自分で実感がわかないし。実感ができることがしたくてここに来ました。そして、「行く人の背中を押すことと、ついでに私の志も連れてって」みたいな感じでここに来ました。

僕は、ボランティア本部に入った動機が一番不純なんです。

このメンバーの中で、一番最近っていうか、まだ一、二ヶ月くらいかな、僕がここに入ったのは。そこに貼ってある求む編集委員って書いてあって、本に名前が載るっていうから入りました。あと、あの、ボランティアはずっとしようしようとは思ってたんすけど、何にもできないでここまで来て、最後に何かできるかなみたいな感じがあったんでここで。最後についていうか。なんかできそうだったからきました。

学生であることとの両立がすごい難しかった。

出来たって言い切れないな。カウンター業務をやりつつ授業に出るといのが、一番大変で出来てない。本当はここに誰かがずつといて、いつでも、誰が来て「話ができる状況」にしたかった。

だけど、やっぱり、学生であるはずだから授業には出ななきゃいけないし、出ないと卒業はできないし。なんかそこがもうちょっとうまくやれる方法が見つかればいいのになとは思いますがね。

現地にろくすっぽいけなかったってのが、一番やりたくって出来なかったことです。

本部で私がしたのは、この掲示板借りたし、ウェブサイトも作ったし、メルマガもメールリングも作った。だけど、それでも本部が持っている情報は、ほんとにわずかで、そんな情報すら内側でぐるぐる循環してる感じがして、外にまだ溢れ出る力が弱かったような気がします。

持つてる情報も持つてない情報も、ばしばし出していかなきゃいけないなっていうのが、やっぱり大切なこと。

「その、出す情報はどこから出すんだよ、湧いて出る訳ねえじゃねえか」というけど、電話連絡は毎日本部でやっていましたけど、日に日に情報は変わるし、現地のボランティアセンターも、みんなそれは現地ですから忙しいようでした。ただ電話したからって、ある意味邪魔なだけっていう部分もあるし、どうやって情報を拾ったらいいのかっていうのは手探りでした。今度次があるなら、もうちょっとうまく情報を拾えるようになりたいなーと思いつつ、良策は思い浮かばずです。

もっともっと密につながって、もっと情報を吸収出来れば良かった。

中越の人がわからなかったっていうのと、新潟ってことを知らない学生がいたっていうのと、僕が知らなかったっていうこと。やっぱり行ってみる機会が少ないことによる、必要な所とそうでない所の見極めがで

きなかったせいで、ペンパルプロジェクトはうまくいかなかったのかなあと思います。やっぱり情報が集まってくるってさっきも誰か言ってたけど、集まってきたり、なんか古い情報だったりっていう所が、どうも前線の情報が入ってきてなかったから、取りに行くだけの力とつながりがなかったから出来なかったのかな。

リアルタイムで入ってくる情報が、本当であったり、嘘であったりとか、ということがありました。

本部にいると、いろんな所から情報を得られるので、情報量としては豊富だと思えますが、ここは下越で、震災がおこっているのは中越なので、本当のかなとか、生の情報が得られにくかったかなっていうのはやっぱりありますね。これはほんとに今度の課題で、新潟県まあ、ほんとにどこで震災おきてもおかしくないもう時代なので、今後どうしようかって対策はしていなければならぬと思っています。



活動を「しつぱなし」だった。

僕らの企画したプロジェクトにせよ、あと各学生が現地に行つてどういう活動をしてどういふことを思ったのかということにせよ、どういふことを失敗したつていうのを、もつと記録などして、その次に行く人たちに、活動する人たちに、アピールやアドバイスが出る環境を作ればよかつたのではないかと、今は思っています。

地震がおきて災害があるつていふのは、中越で終わりじゃないと思います。

今回出来なかつたことが次回出来るようにとか、今回僕らがやつてきてこんなことをしてたつていふ、この記録にしてもそうですけど、次起きた時に、これを読んだ他の大学生が大学の中でこういうことが出来る、出来たつていふようにとつてくられたり、そこでの地震の被災者の人たちにも僕らのやつてきたことが活かされるのだつたら、僕らのやつてきた意味があつて、まだまだこれから僕らのやつてきた意味が増えていくのではと思います。

ボランティア側から見ると、「被災者」という人たちのイメージが、自分の中で「ずれているな」といふのはその時感じました。

雪下ろしボランティアで、川口あたりに行った時のことです。が、さしあたり「困つてる人」ではないのですが、そこで家が地震で壊れたおばあちゃんに会いました。

そのおばあちゃんは、市役所の手違いでお金が思ったよりもおりなくて、そのために家が直せなくて、とても悔しがつていました。それで、ただの「ボランティア」である私たちに、「悔しくて眠れんかつたわ」といふような話をたくさんして、ちよつと泣いてたんですよね。

私たちはその話を聞いて、ただ黙つて聴くしかないんですね。「それはそれは御愁傷様でした」とは、絶対に口が裂けてもいえない雰囲気ですよ。もう、「うなずく」くらいしかできないんですけれど、でも最後まで聴いた時、「ありがとや」つて、話聴いてくれただけでも良かったと言ふ風に言つてもらえました。

困つてる人じゃなくて、地震

が起つたことによつて余計な不安を抱えた人ではあるのかも、しれないとは思いました。

やつぱり、ちよつと甘く見たといふかずれてたなつていふのは自分の中でありましたね。

被災地にいるのは普通の人たちで、家の中は「しつちやかめつ

ちやか」になり、車で家族寝ていたり、一日連絡がつかなくなつたことがありました。また、しばらくして実家に帰ることがあり、その道中、高速道路を通ると復旧工事をしていました。工事の作業員がそのまま道路上に飛び出してきて「危ない」と思ふこともありました。

でも、そういうことがたとえあつても、被災地にいるのは普通に生活している人たちなんですよね。そういう視点が、ボランティアする側にとつて少し欠けてるといふか、「ちゃんとあつてるのかな」といふのはたまに思ふます。何しろ自分が普通に実家として被災地に戻つてるものですから。

普通に生活、「ちよつと、こ

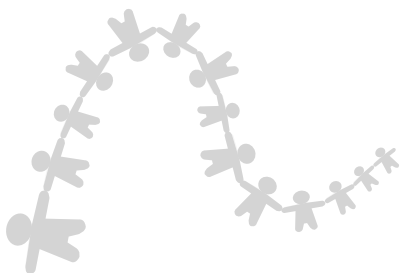


りだよ」といふような。ちよつと「地震の揺れに慣れて、うちの猫、逃げるの早くなつたよ」とか。「余震がきてるのに、うちのばあちゃん、避難拒否してるよ」といふメールがハートマーク付きで妹からきたりとか。

必要、使えたかもしれないけど、でもそんなのいっばいあつたつて困るわけだし。結構、そういう意味では学ぶこと、みんなが気づかなきゃいけないことつて結構あるのかもしれないと活動してて思います。

あまりみなさんの日常と変わらないですよ。そういう視点を欠くと、結構被災地の側の人にとつて失礼なことを知らず知らずの間に、善意のうちによつちやうんじゃないかと思ひます。そんなことを、ボランティアを通して感じるものがたまにあります。

使いかけのせつけんは被災地の人だつて嫌です。送つてこれでも困るだろうし。古いタオルはそりや一番初めの時は何か



活動の支えになる「お金」

新潟大学震災ボランティア本部の中に「理事会」という組織があります。主にボランティア本部を運営していく上で必要となってくるお金を管理するところで、いわゆる「会計」といったところでしょうか。理事会のスタッフは新潟大学震災ボランティア本部の学生スタッフが兼任する事となっています。理事会には、「理事会規約」というものが存在し、お金の使い方、予算請求から決算報告にいたるまで、事細やかに書かれています。

本部を運営していく為には、何かとお金がいります。例えば、活動の為に文房具や、ボランティア活動の為に交通費など多岐に渡ります。では、これらのお金はどのようにまかなっているのでしょうか。それは、大学からの援助や、各自治体や企業などが運営している「助成金」に応募するなど、様々です。新潟大学震災ボランティア本部でもSONYの助成金に応募し、25万円頂きました。

「ボランティア活動は無償であるもの」と思い、学生スタッフの中でもかなり自腹を切った方もいるようです。

震災の記憶を風化させない

ための工夫…

2005年4月―震災から半年の節目の月に、新潟大学では多くの新入生を迎えました。

震災から月日が経つにつれて、学内を含め、社会全体の新潟県中越地震に対する関心は薄れていき、震災に関する報道も減っていききました。

しかし、被災地の多くが冬の間は雪に閉ざされ復興は道半ば。再び震災への関心を高め、まだまだ復興していない、まだ協力を必要としているということを知ってもらうために、被災地の写真を展示しました。

被災市町村の行政や報道機関、個人に至るまで様々な方から協力して頂き、数百枚に渡る写真が集まりました。展示できたのはほんの一部でしたが、来場者の方に大きな影響を与えることができたと思います。

写真提供：小千谷市災害ボランティアセンター

学生発。

うまく続く、持続可能な組織づくり。

新大祭での展示活動

私たち新大震災ボランティア本部は、これまで被災地の情報提供やボランティアコーディネート、ボランティアプロジェクトの立ち上げ等の様々な活動を行ってきました。

しかし、学生たちへの知名度はあまり高くはなく、「新大震災ボランティア本部ってなにしているの?」「ボランティアアコードィネートって何?」「そんな疑問の声があっただのも確かです。

そこで今回の新大祭では、中越地震の被災状況と私たち新大震災ボランティア本部のこれまでの活動内容を模造紙にまとめ、展示しました。見所は「プロジェクト紹介」と「被災地拡大マップ」。どちらも本部の「イラスト職人」たちの努力の結晶であり、特に拡大マップは模造紙4枚を使った力作です。

あまり堅くならず、見やすく分かりやすいものにすることができました。

チャリティバザー

災害において、物資の行き先がなくなるという問題があります。本部も例外ではなく、学内外から寄せられた物資が現地に届けられないままになっていました。

さらに、学生であるが故に現地へ行って活動したいという想いがあるのに実現できないという状態がありました。

どうしたら物資の送り手の想いを繋げることができるだろうか。そして、学生が大学に居ながらにしてできることはないか、という2つの疑問からチャリティバザーが生まれました。

第1回は本部に集まっていた物資に加え、学生・教職員から新たに物品を集めて校舎の片隅で販売しました。5日間に渡る販売の結果、33,337円の売上金を義援金として送ることができました。

第2回は新大祭にて開催しました。新たに物品を集めたほか、新潟県宛てに送られてきた物資を無償で提供して頂きました。2日間に渡る販売の結果、24,760円の売上金を義援金として送ることができました。

このほかにも、新潟県災害対策本部主催の「チャリティバザー in 県庁」に多くのメンバーが参加しました。

復興へ向けて、多くの協働が生まれた。 学生にとっても、学びと実践の場である。

新大祭で『掘るまいか』

新入生に震災を意識してもらい、風化させないようにするため、当初は六月ごろの上映を計画していました。しかし準備期間の不足などから前期中の上映を見送ることとなり、外部からのお客様も多数いらつしやる、新大祭での上映を決定しました。

前段階での告知が少なかつたためか、期待したほどのお客様を集めることは出来ませんでしたし、新入生への告知という目的も、十分だったとはいえません。それでも、映画の舞台となった山古志が、まだ多く復旧されていないという事実をお知らせすることはできたのではないかと思います。

震災ミュージアム

震災ミュージアムは、「震災の凄さ、恐ろしさを多くの人に忘れないでいて欲しい」という目的で立てられたプロジェクトです。

元々、中越復興市民会議というボランティア団体が企画したもので、私たちは物品集めと展示会場の準備に参加しました。

展示された物品は、地震の力によってひどく破損してしまった物（例えばポットやコーヒークップ、電子レンジ等々）で、実際に地震の被害が大きかった地域から収集し、展示しました。

この震災ミュージアムは長岡で行われましたが、いずれは物品を借りて、新潟大学でも展示会を開きたいと考えています。「多くの人に見てもらいたい、忘れないでいて欲しい」という想いを込めて作られた展示会です。

写真提供：小千谷市災害ボランティアセンター

ここまでやってきて見えたもの

ぶっちやけ 腹のうち

自分自身の成長に

つながった。



安本典生さん

やすもとのりお

新潟大学理学部2年。
新大震災ボランティア本部ではカウンターマネージャーとして活躍。
また、新大震災ボランティア本部一のオフィスワーカー。『ボランティア報告書』の編集委員でもある。

「昔はボランティアなんてっ
て思ってた」

ボランティアは、僕の住むところというか、入るところではないなみたいな感じで。今までのいろいろな募金などをやってきた姿を見てましたけど、現実的にあのお金どこにいくんだろうなどと、信用が無かったです。される側にとって役に立つと思わなくて、自分の利益になるのかなって。日本海沖で重油

流出したということで、僕の友達が行ったんですけど、表彰されましたよ。だけど、いいこぶって感じてましたね。今回の地震でも、大学でなんかすんのかなって思っていました。募金ぐらいは、まあ、するかもしれないけど、ボランティアしたいと思わなかった。

認められるとうれしい

昔サークルをちよつとやっ

てたんですけども、嫌になっちゃって、暇になっちゃったんです。で、たまたま地震おきて、学務に用事があったからきて、なにやってくるんだろう、って覗いたら、「あーどうぞどうぞはいってください」って。11月の4日だったかな。ボランティア本部に入って、例えばうぐいす嬢ですとか、どこで学んだか知らないような、いわゆるコーディーネーターをやつて、でも、僕やり方知らないし。僕も

ちよつとその組織の中で、本部の中で役に立ちたいというよりも存在感をアピールしたいというので、できるとしたら、事務的なこと。コーディーネーター記録を最初に作ったのかな。最初ボランティアでこういうのが必要なのかわからなかったけど、偶然に宮崎さんが「安本さんがこういうフォーマットを作りました」って。みんなに認められて、うれしいなって。

ここではか？六日町ってどこですか？とかきいてた。でも、僕が旅行会社に行ったときに「こういうチラシを見てきたんですけど」って、僕が渡したら、ちよつと待っててくださいね、っていつて、でっかいファイルを出して、ばーつとしらべて、しつかりしてるんだなって思って、うちらもきた人にバーと調べられて、ここ行ってくださいって、したらいなって思ってたんです。皆さんがボランティアアコーディネイトをする活動を、もつと円滑に出来るように、いつも心がけて、受付カードのフォーマットを作ったりとか、情報共有の場になるミーティング、今日こんな活動をやりましたっていうのとかも整理してました。

「ボランティアなんて」だったのに

いろんな広報とかで、他のボランティアさんとかNPOに「なんではいったんですか？」って聞かれると、新潟大学にいてその他人事じゃないなと思つて、だからやってるんですって、だからやってくれるんですって、頃はもう興味なかった。でも、今までボランティアは自分の住む世界じゃないと思つていた人間が、認められたときに結構役に立つのかなって。自分の中でボランティアという感覚が変わつた。今も信じられなくて。ボランティアに興味がなかった人間が事務的なことをやっても通用するんだなって。

自分の居場所

こういうチャーシュー悪いんですけど、中越の人を助けたいというのは、看板みたいに挙げるものではない。本当にぶつちやけますけど、自分の居場所ですね。ボラ本部に来ると仲間がいるし、能力生かされるし、楽しかったんやと思う。今まで知らなかった能力というか、モ

ノを持つてる人がいて、本当に勉強になります。

トップのいない組織

ボランティア本部の「かしら」となる人が本当にいないし、つくろうともしないし、客観的に見てみると、みんながリーダー的だから、本当にカルチャーショックでした。たまにまともじゃないということもありますけど、現にこうやって1年たつて存在してるから、これは、認めざるを得ない。でも、大学はお役所だから、トップ誰だとか、誰に聞けばいいんだって。

本部の運営は僕がやってきたんですけど、そういうときに僕じゃなくて、もつというんな事を知ってる上級生に、先輩が先輩に報告書出してくださいというそんな大きなことについていのかなくて。だから、本当に冗談を交えて、藤本さんやってくださいいよとか。まだ2年だつていうのもあるけども、今も思っています。結構、重大な決定つていふのをなんでか知らないけど、聞かれたりするんですよ。今年入つてこられたスタッフはわからないことがあるだろう

からいいんですけど、それは大滝さんに聞いたほうがいいじゃないですか？とか、ITだったら樋口さんに聞いたほうがいいじゃないかとか。答えるけども、先輩がじゃばるところじゃないんじやないかって言うところがありますね。

もつと自信を持つて

スタッフの皆さんに言いたいのは、今までほんとに普通の大学生生活では味わえない、体験できない経験してきた。コーディネートなんて僕、地震がなかったらやってなかつたですよ。今までほんとに得られなかつた経験をしたら、もつと自信を持つてもらいたいと思います。大学では制約があつて、あれできないこれできないとあるけども、経験値があるのに、こういう企画ができないんじゃないかなつていうのが、いろいろみてきて、本当もつたないし、もつと大学を使うべきだと思う。資金面にしても、組織的なものにして、バックアップがすごいんですよ。

これまでやってきたいい経験、能力を自分の中に閉じ込め

ておくんじやなくて、もつとアウトプットしたほうがいい。毎月一回は災害がおこつて。東京でも仙台でも。そういうところで、うちのノウハウ的なものをもつともつとアウトプットしていったらいいと思う。学生が主体というのが一番のメリットで、大人とからんじやうと、いろんな意味で制約があるんですよ。

四つの役割が必要だ

ボランティアという大きなフィールドの中で、四つの役割があると思うんですよ。現地では自分の肉体を使って活動する人。コーディネイト、情報を集めて興味あるボランティアを現地に行かせるという人。よくNPOがやっているボランティア自体を企画する人。ぼくがいままでやってきた、企画する人であるとか、ボランティアに行く人であるとかコーディネーターする人のそういう作業とか活動を円滑にするための活動をする人。この四人がいると思うんですよ。

ボランティアまだの人へ

ボランティアやってますという、ほんとあいつ偽善者だといわれがちだけど、これっぽっちもボランティアはやつたほうがいいと思つたことのない人間が継続しているわけだから、最初は不安かもしれないけども、おもしろはんぶんでもいいから、ボランティアというところに身をおいてみるのも僕はいと思う。現地ボランティアに行くとか、僕みたいに事務的なことが得意だとか、交渉が得意だとか、お金のことが得意だとか、ボランティアやっていくということが、すごく重要なんですよ。自分を一回りビックにするとか、成長させるにはほんとにいいフィールドだと思う。とりあえずマイナスにはならないと思う。お金はちよつとマイナスになるかも。ボランティアはいろんな人にやつてもらいたいんですけど、ひとつだけ守つてほしいことがあつて、それは、ボランティアに対する責任というのほちよつと頭のどこかに置いてほしいな。

災害復興科学センターとボランティア

平成17年度、新潟大学では学内措置で復興科学センターを設置し、中越大地震被災地にかかわってきました。平成18年度からは文部科学省・財務省に予算が認められ、新潟大学災害復興科学センターが発足することとなりました。

このセンターは、生活安全部門（生活安全ネットワーク、こころのケア、ボランティア、社会基盤、災害法学、緊急時対応、アーカイブスの7分野を予定。以下同じ）、地域産業支援部門（地域産業政策、農業）、防災部門（地域防災計画、複合防災）、情報通信部門（広域通信、災害地理情報）の4つの部門を設置する予定です。

各部門、各分野それぞれ、大学の持つ専門性を発揮しながら、災害にあわないための、災害から生命等を守るための、災害から復興するための（81頁左上へ）

特別な災害ボランティアから

日常生活の充実へ



写真提供：小千谷市災害ボランティアセンター

豪雪報道に隠れた地震復興

中越大地震の後、すぐに冬を迎えました。被災地に追い討ちをかけるかのように19年ぶりの大雪となりました。そして今冬も暖冬予想を大きく裏切り、平成18年豪雪という命名までされました。とことん自然は酷なものです。「積雪4mの町」という題で全国ネットのワイドショーは連日、中越地方の山間部をレポートしていました。ただ報道するだけ、そして被災地に触れることもあまりなく、多くの人からは忘れられつつあるようです。

しかし被災された方々はその只中にあり、いまだにボランティアとしてかわり続けている人たちにとっても、地震からの復興は常に頭から離れません。こうして報告書を手に取っていただいた皆様方も、忘れずいてくださったわけですが。

災害に備えて？

本書では、新潟大学にかかわる様々な地震復興ボランティアを紹介してきました。そのなかで、ボランティアコーディネーターというものについても理解いただけたでしょうし、今後、類

似の活動を行うときの一助になるかと思えます。

「類似の活動とは？」と問われると、別の・新たな災害におけるボランティアということになります。もちろん、災害が起きてほしいわけではありません。しかし、災害時や災害後に活動するから「災害ボランティアなのです。「備えをしておいたよかった」と言うことは、災害が起きてよかったと言っているかのような矛盾が生じます。

日常が大切

そうではありません。災害のみに備えようとするのではなく、普段の生活やいろんな関係づくりを行っていることが、結果として災害時に役立つということなのです。信頼できる人間関係があるからこそ、呼びかけに応じてボランティアに向かう。自分の意見を言える自由な雰囲気があるから、やりたいボランティアを工夫できる。人の話を聞く心や技術を持っているから、被災者のニーズを引き出せる。パソコンや携帯を日ごろ使いなれているから、災害時の情報収集・発信手段として有効活用できる。そういう、日常の

積み重ねが、災害時に活かすということなのです。災害直後だけはどうもたいへんそうだからボランティアをする、ということでもよいのですが、普段からボランティアをしていて、そのうちの何人かが災害ボランティアを行った、そういう裾野の広いボランティアが形成されていることが望ましいでしょう。

広範なボランティアセンターへ

ただ実際は、災害ボランティアが初めてのボランティアという人も多いです。そして、災害の記憶が薄れるにつれて、ボランティアへの志向も弱まってきます。震災ボランティアの活動をまとめた今だからこそ、つぎの扉を開く段階にあります（もちろん、震災ボランティアは継続しながら）。

新たに創るボランティアセンターでは、震災に関するニーズにとどまらず、学内外の様々なニーズを発掘します【ニーズ調査】。今までボランティアのまっただくなかった新しいニーズもあれば、既存の団体を取り組んでも人手不足でニーズを満たせないでいたものもあるでしょう。

科学を研究します。どれも大学の研究活動ではありますが、ボランティア的要素もあります。たとえばアーカイブ分野につながった、被災地の旧家古文書等の整理作業（矢田俊文『新潟県中越地震文化遺産を救え』（高志書院、2005年6月）に詳しい）は、専門的な活動ですが、ボランティア的な色彩もかなり濃いところがあります。

一方、震災ボランティア本部は発展的に解消し、災害ボランティアに限定せず広く活動のフィールドを広げていこうとしています。

災害復興科学センターにおけるボランティア分野の研究・活動は、これらと連動しながら、ボランティアの理論と実践をつないでいきたいと考えています。



写真提供：小千谷市災害ボランティアセンター

本文・解説

雲尾 周（くもお しゅう）

新潟大学大学院現代社会文化研究科助教授

ボランティアにかかわって？
このようにして、多くの人にボランティアにかかわってもら

ボランティアに興味のある人に対してそれらを伝えることで、想いをつなぐことができず【ボランティアコーディネーター】。いくつかのニーズやボランティア活動（及び団体）を組み合わせることで、新たな展開を図ることも出来ます。
活動団体がなかったりニーズに答えきれいなかったりする場合や新しい領域などについては、ボランティアセンター自体が実際にボランティアプロジェクトを企画・運営することもあ

ボランティアにかかわって？
このようにして、多くの人にボランティアにかかわってもら

進】。
これらの活動を行うためには、センターのスタッフやボランティアにかかわる人たちが多種多様なスキルを身につける必要があります【養成】。本書にも登場しましたファシリテーター、コーディネーター、ファシリテーターとしての心構えというようなものが、ニーズ調査やボランティア促進の際にも必要です。
ボランティアにかかわって？
このようにして、多くの人にボランティアにかかわってもら

ボランティアにかかわって？
このようにして、多くの人にボランティアにかかわってもら

現にも結びつきにくいのです。
日常生活で
したがって、特別に行うという意識を持たずとも、だれもがボランティアをする社会というのが本来の姿なのです。それをボランティアという名称で呼ぶか呼ばないかだけです。たとえば落ちていないごみを拾わなくとも、それまでたばこの吸殻を捨てていた人が捨てなくなったら、それがボランティアの始まりです。ボランティアセンターにおける養成活動まで行かなくとも、日常生活のいるいるな場面、今までも少し意識を高く持つて社会との関係を考えるだけで、ボランティアのスキルアップにつながります。
本書は、ボランティアコーディネーター組織のハウツー本ではありませんが、想いをつなげた本としての要素が大きいです。その想いをより長く、より広くつなげるためには、ここに記した「日常化」がひとつの帰結です。
この扉は、けっこう重いですが、しかも、またしまりそうです。みんなですこしずつ、しっかりとあげましょう。

「中間支援」の現場から

足を踏み入れる窓口、 たくさんあったほうがいい。

初めてボランティア活動をしたのは大学3年の終わりの2002年3月。

9・11後の空爆で大きな被害が出ていたアフガニスタンへ、医療品を贈るために募金をしていた団体の活動に参加させていただきました。

まず目に飛び込んできたのは、豊かなひげをたくわえた体格の良い二人の男性。場所が場所だけに新潟にもアフガニスタンの人がいるんだなあ」と私は妙に納得してしまいました。後で確認したところ、そのお二人はひげが濃いというだけで(キャラも?)、アフガニスタンではなく日本人だと分かりましたが。

しかしそれまでの学生生活のほとんどを家と大学の往復に費やしてきた私の目から見ると、そこはまさに別世界。活動している人も外国人のようでした。

「足元に、自分の知らない新潟があります」

そこに足を踏み入れるかどうかはその人の判断ですが、そのための入口はたくさんあった方がいい。

そういう機会を一緒に作っていったらと思います。

めぐろ ゆうすけ

半年間のフリーター経験の後、大学時代のついで新潟NPO協会に拾われる。学生の地域参加と大学-NPOの連携促進を担当。悩みは慢性的な運動不足。



目黒雄介

NPO 法人新潟NPO協会・事務局

編集	中越大震災ボランティア活動報告書編集委員会
執筆・インタビュー	中越大震災ボランティア活動報告書編集委員会 雲尾 周 (新潟大学大学院現代社会文化研究科助教授) 石坂 良成 (新潟大学学務部学生生活支援課) 佐藤 正司 (新潟大学学務部学生生活支援課) 阿宮 由子 (NPO 法人まちづくり学校) 佐野 智香 (NPO 法人まちづくり学校) 西田 卓司 (NPO 法人虹のおと) 服部 祥平 (名古屋大学大学院 1 年) 目黒 雄介 (NPO 法人新潟 NPO 協会) 宮崎 道名 (道屋主宰 NPO 法人まちづくり学校)
撮影	大滝 優果 千葉 亜希子 筒見 尚輝 中井 美紗 樋口 瞳 藤本 隆太 安本 典生 (以上 新潟大学学生) 阿宮 由子 (NPO 法人まちづくり学校) 宮崎 道名 (道屋)
写真提供	小千谷市災害ボランティアセンター NPO 法人虹のおと NPO 法人新潟 NPO 協会 新潟大学学生部学生生活支援課 新潟大学震災ボランティア本部 新潟大学農学部 道屋
イラスト	阿宮 由子 (NPO 法人まちづくり学校)
ページデザイン	和田 一良 (編集工房わらく)

中越大震災ボランティア活動報告書編集委員会 (50 音順)

清野 勝弘 (編集長)
今西 勇人 (副編集長)
柳沢 直樹 (同上)

五十嵐 梨佳	今井 祐輔	大滝 優果	小杉 真佑美	田口 美雪
千葉 亜希子	筒見 尚輝	登坂 陽介	中井 美紗	長崎 千昌
樋口 瞳	藤本 隆太	星 彩美	堀内 太一	水野 舞
安本 典生	山上 達郎			

災害ボランティア活動報告書 ～ボランティアコーディネート編～

中越大震災ボランティア活動報告書編集委員会 編
新潟県中越大震災ボランティア活動のあしあと

平成 18 年 3 月 31 日発行

発行 新潟大学

装丁・レイアウト 道屋
〒950-2162 新潟市五十嵐中島 5-1-75-2F
TEL/FAX : 025-261-3937

印刷 株式会社 博進堂
〒950-0807 新潟市木工新町 378-2
TEL : 025-274-7755 FAX : 025-274-7679

